

宇都宮市埋蔵文化財報告第21集

聖山公園遺跡Ⅳ

——昭和60年度発掘調査概要——

昭和61年3月

宇都宮市教育委員会

発刊にあたって

宇都宮市営聖山公園(市営第2霊園)の建設に伴う本遺跡の発掘調査は、5か年計画で進めておりますが、その第4か年目にあたる昭和60年度の調査を終了いたしました。

今年度も、古代人の生活の跡である竪穴式住居跡や古墳等を中心に発掘作業を進めてまいりましたが、なかでも本遺跡内で最大の規模を有する將軍塚古墳の調査においては、周溝の形態、周溝内土坑の存在、土器の副葬等数々の貴重な資料を得ることができました。

このたび、今年度(昭和60年度)の調査成果のあらましとして本書を刊行いたしました。各方面で活用されるとともに、郷土における原始・古代解明の一助となれば幸いです。

末文になりましたが、調査にあたり終始御教導いただきました栃木県教育委員会文化課、栃木県立博物館、栃木県文化振興事業団の各指導機関及び指導委員の国士館大学教授・大川 清先生、専修大学教授・久保哲三先生、宇都宮市文化財保護審議委員会委員・埴 静夫先生、同じく小堀時蔵先生に対しまして厚くお礼申し上げます。

なお、本遺跡の発掘調査は、今年、予定された最終年度を迎えることとなります。上記の各機関各位をはじめとして関係する方々の一層の御指導、御支援をお願い申し上げます。

昭和61年3月31日

聖山公園遺跡発掘調査団長

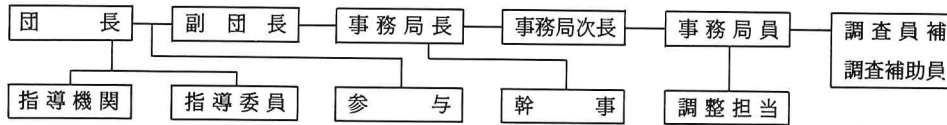
宇都宮市教育委員会教育長 後藤 一雄

例 言

- 1 本書は、昭和60年4月～同年12月に実施した宇都宮市上欠町に所在する聖山公園遺跡(宇都宮市営第2霊園造成地)の発掘調査概要の報告である。
- 2 発掘調査は、宇都宮市教育委員会が主体となり、次頁に示したとおりの調査組織に基づき実施したものである。今回は5か年計画の4年次目であり、約8000㎡の面積を対象とした。なお、当初の計画どおり本遺跡の調査は来年度をもって終了する予定である。
- 3 遺構・遺物の整理・実測等は、金田信夫の協力を得て、梁木誠がこれにあたった。また、遺構・遺物実測図のトレース、遺物写真撮影は、梁木がこれにあたった。
- 4 本書の編集は梁木が、また執筆は定岡明義、手塚英男との協力を踏まえ、梁木がこれにあたった。
- 5 発掘調査中、市民生活課・尾本秀史、黒崎民雄、福島重文、公園緑地課・大森功壹の各氏には種々の御協力を得た。記して感謝の意を表する。

[調査組織表]

●調査団組織



●昭和59年度調査団

団 長	教 育 長	後藤一雄	指 導 機 関	栃木県教育委員会文化課	
副 団 長	教 育 次 長	田中敏夫	〃	栃木県立博物館	
事務局 長	社会教育課長	加藤悦男	〃	栃木県文化振興事業団	
事務局次長	文化振興係長	小林錦一	指 導 委 員	国士館大学教授 大川 清	
事務局員 (調査員)	文化振興係 (担当者)	定岡明義	〃	専修大学教授 久保哲三	
		手塚英男	〃	市文化財保護委員 塙 静夫	
		〃	〃	〃 小堀時蔵	
		阿部信弘	参 与	民 生 部 長 荘司利明	
調 査 員 補	市文化財調査員 本遺跡調査員	松本笑悦 金田信夫	調 整 担 当	都市開発部長 大橋 勇	
				市民生活課長 川島侯司	
				公園緑地課長 斎藤亨二	
				市民生活課 森田 勇	
				〃 黒崎民雄	
				〃 貝沼三雄	
〃 菊池 博					
〃 聖山公園管理事務所 尾本秀史					
〃 福島重文					
調査補助員	安生ミカ	小林ミキ	小林マサ	斉藤イク	島崎熊夫
	福田カネ	福田タイ	福田タイ	堀田一夫	松本恵美子
	松本和子	松本トシ	松本トリ	味野和テツ	森ヒロ子
	谷中一郎	山崎トキ	渡辺フミ		

目 次

I	調査に至るまでの経過	1
II	周辺の遺跡	
1	縄文時代	1
2	古墳時代	2
III	調査の経過	
1	前年度までの調査概要	8
2	本年度の調査概要	9
IV	検出された遺構と遺物	
1	將軍塚古墳	13
2	30号住居跡	24
3	36号住居跡	27
4	37号住居跡	31
V	まとめ	34

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡	3・4
第2図	深津愛宕塚古墳出土土器	6
第3図	聖山公園遺跡遺構配置図	11・12
第4図	將軍塚古墳墳丘測量図	13
第5図	將軍塚古墳周溝断面図	14
第6図	將軍塚古墳全体図	15・16
第7図	將軍塚古墳墳丘断面図	17
第8図	將軍塚古墳前庭部付近周溝断面図	18
第9図	將軍塚古墳土坑断面図	19

第10図	將軍塚古墳土坑 8 及び土器出土状態	20
第11図	將軍塚古墳出土土器	22
第12図	將軍塚古墳出土刀子	23
第13図	將軍塚古墳出土白玉	23
第14図	將軍塚古墳盛土内出土土器	23
第15図	將軍塚古墳南裾部溝内出土土器	23
第16図	30号住居跡平面図	24
第17図	30号住居跡カマド実測図	25
第18図	30号住居跡出土土器	26
第19図	30号住居跡出土白玉	27
第20図	36号住居跡平面図	28
第21図	36号住居跡カマド実測図	29
第22図	36号住居跡出土土器	30
第23図	36号住居跡出土白玉	30
第24図	37号住居跡平面図	32
第25図	37号住居跡貯蔵穴土器出土状態	33
第26図	37号住居跡出土土器	33

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧表	5
第2表	30号住居跡出土土器一覧表	27
第3表	36号住居跡出土土器一覧表	31
第4表	37号住居跡出土土器一覧表	34

図 版 目 次

PL1	(1) 発掘前の將軍塚古墳	(2) 將軍塚古墳周溝確認状況
PL2	(1) 將軍塚古墳周溝完掘状況 1	(2) 將軍塚古墳周溝完掘状況 2
PL3	(1) 將軍塚古墳東部周溝	(2) 將軍塚古墳東部周溝
PL4	(1) 將軍塚古墳西部周溝	(2) 將軍塚古墳北東部周溝
PL5	(1) 將軍塚古墳前庭部前面周溝断面	(2) 將軍塚古墳第 3 トレンチ断面

- | | | |
|------|---------------------|---------------------------------|
| PL 6 | (1) 将軍塚古墳第1トレンチ断面 | (2) 将軍塚古墳第1トレンチ東壁断面 |
| PL 7 | (1) 将軍塚古墳周溝内土坑5断面 | (2) 将軍塚古墳周溝内土坑5 |
| PL 8 | (1) 将軍塚古墳周溝内土坑6断面 | (2) 将軍塚古墳周溝内土坑6 |
| PL 9 | (1) 将軍塚古墳周溝内土坑8断面 | (2) 将軍塚古墳周溝内土坑8 |
| PL10 | (1) 将軍塚古墳周溝内土器出土状態1 | (2) 将軍塚古墳周溝内土器出土状態2 |
| PL11 | (1) 30号住居跡 | (2) 30号住居跡カマド周辺土器出土状態 |
| PL12 | (1) 36号住居跡 | (2) 36号住居跡と将軍塚古墳周溝の切り
合い関係断面 |
| PL13 | (1) 37号住居跡 | (2) 37号住居跡貯蔵穴土器出土状態 |
| PL14 | (1) 将軍塚古墳出土土器 | (2) 36号住居跡出土土器 |
| PL15 | 30号住居跡出土土器 | |
| PL16 | (1) 37号住居跡出土土器 | (2) 出土鉄器及び石製模造品・白玉 |

I 調査に至るまでの経過

姿川と武子川に挟まれた台地上の山林と畑——宇都宮市上欠町聖山公園造成予定地は、古代人の生活の場である集落と古墳の点在する遺跡の宝庫である。宇都宮市営北山霊園(同市岩本町)に次ぐ第2霊園造成地の選定作業のなかで、上欠町にその具体的な造成計画の意向打診が行われその後、可能な限りの遺跡保存を大原則に内部協議が進められていった。以下は、その間の経過である。

55年8月 霊園造成計画の地元説明会に前後して、市教育委員会独自の遺跡分布調査を行い、遺跡保存のための方策を更に検討した。

56年8月 遺跡の開発が確定的になるなかで、「埋蔵文化財の保護と開発に関する基本方向」を定め、現状保存のための方策を更に検討した。

同年11月 宇都宮市教育委員会の直営事業として発掘調査を行うことになり、発掘調査計画策定のための教育委員会独自の最終調査を行った。

同年12月 栃木県教育委員会から遺跡保存及び発掘調査計画策定のための指導を受けた。

57年2月 文化財保護法57条の3の規定に基づく工事等による埋蔵文化財発掘通知書を提出した。

同年3月 遺跡保存及び発掘調査計画の検討案について学識経験者の指導を受けた。

同年4月 発掘調査のための新規職員をむかえ、事務局体制を確立し、詳細実施計画の策定に着手した。文化財保護法98条の2に基づく埋蔵文化財発掘通知書を提出した。埋蔵文化財発掘調査に係る危険防止対策要綱を定めた。指導委員・指導機関も含めた発掘調査団を組織した。

以上の経過により、発掘調査による記録保存のやむなきに至ったが、造成計画において、遺跡の広場の設置、現状保存区域の拡大などの成果をもって発掘調査実施へと進んでいった。

II 周辺の遺跡

本遺跡が所在する姿川上流域は、古くから遺跡の宝庫として知られた地域であり、発掘調査により明らかにされた遺跡も数多い。ここでは、本遺跡を中心に半径2～3km以内に所在する遺跡のうちから、特に縄文時代と古墳時代のものを抽出し、それらの概要をまとめてみたい。

1 縄文時代

樹脂状に発達した舌状台地が続く姿川の右岸台地は、縄文時代集落跡の密集度が特に濃く、県内でも古くから注目されてきた地域である。なかでも、本遺跡より北東部にかけては多く、上欠

遺跡(15)、上欠南遺跡(16)、高尾神遺跡(19)等の発掘調査されたものを含め15あまりの遺跡が知られている。時期的には前期から後・晩期と各時代にわたっているが、やはり中期のものが数的に圧倒しているようである。発掘された前記3例の概要をまとめると次のとおりである。

上欠遺跡(15) 竪穴住居跡52軒、配石遺構13基、屋外土器埋設遺構24基、ピット244基等が検出された県内でも大規模な縄文時代集落跡である。出土土器は縄文中～後期の加曾利E式、称名寺式が主体であり、他に776点にもものぼる打製石斧をはじめ多量な石器類の出土もみている。

上欠南遺跡(16) 竪穴住居跡1軒、円形土坑1基が検出されている。出土土器は縄文前期の黒浜式が主体である。

高尾神遺跡(19) 竪穴住居跡19軒、袋状土坑11基等が検出されている。出土土器は縄文中期の阿玉台式、加曾利E I式が主体であり、他に豊富な石器類も出土している。

これらの他に、発掘調査はなされていないが、縄文中期から晩期におよぶ初網遺跡(17)は、豊富な土器・石器類とともに有孔の土製円板、土偶等の出土もみられる。

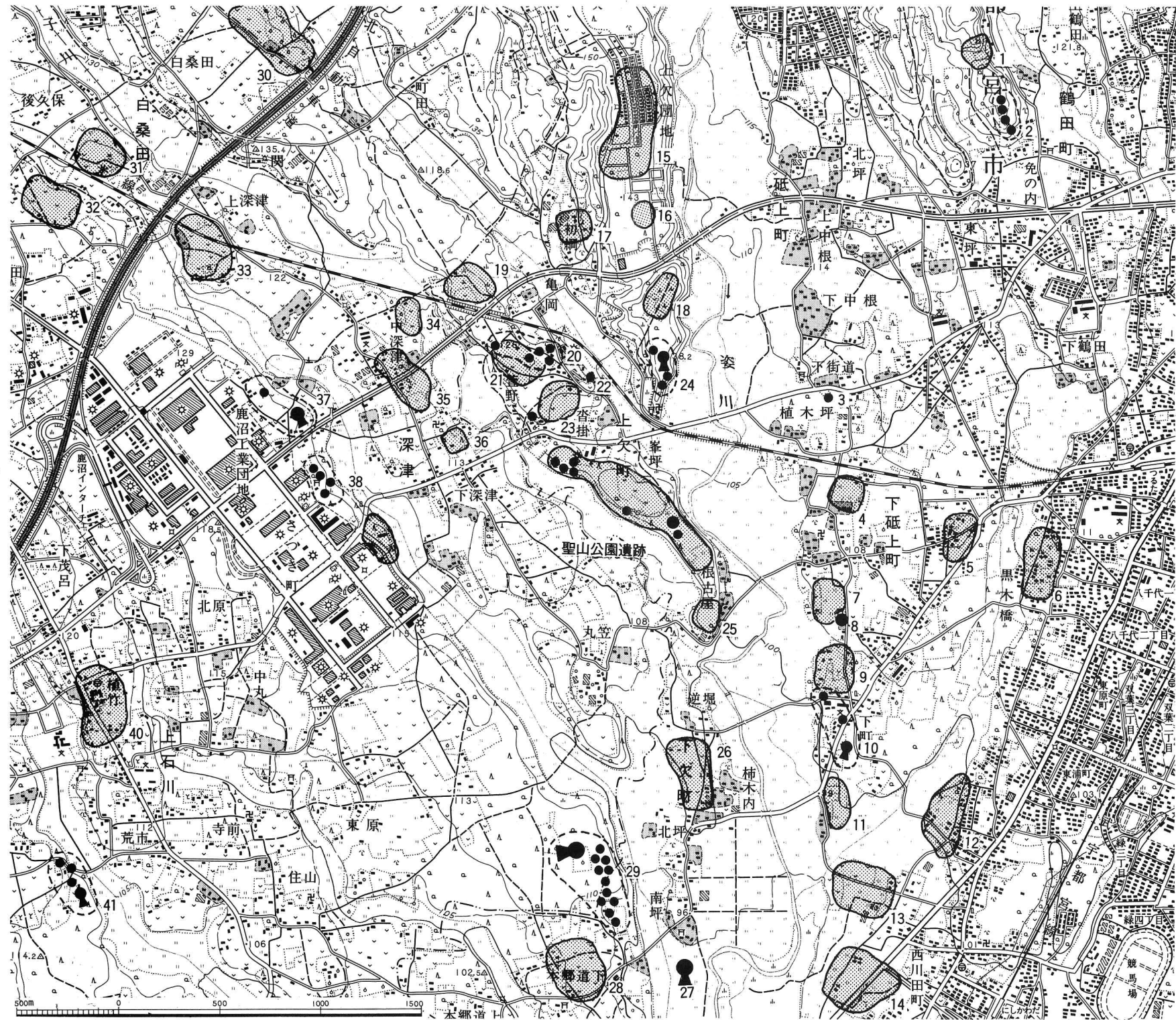
以上のように多数の集落跡が確認されているわけであるが、本遺跡とのかかわりという点から前期のものに限ってしてみると、上欠南遺跡(16)と富士山台遺跡(18)のわずか2遺跡で確認されているにすぎない。しかも、姿川右岸で本遺跡周辺のみという狭い地域に限定されているのが特徴的である。

2 古墳時代

古墳時代の集落跡に関しては、発掘調査例が本遺跡以外にまだない。もちろん分布調査等においては、土師器片の散布をみる遺跡が相当数確認されているわけであるが、その内容、特に時期的なことについての判断となると困難な場合が多い。そこで、ここでは古墳そのものの分布状況を見て行くとともに、出土遺物や主体部等から内容の知られるいくつかの古墳または古墳群について触れてみることにしたい。

古墳の分布は東部の市街化された地域を除き、ほぼ全域にわたっているが、大きくみれば姿川沿岸、それも特に右岸沿いに集中しているようである。また、標高が徐々に高まりやがて山地帯にさしかかる北部はやはり少なくなっており、特に姿川の右岸においては、本遺跡周辺が分布の北限に近い。立地あるいは占地をみると、低地、低台地さらには舌状台地の突端とバラエティーに富んでいるが、一つの傾向としては、姿川に流れ込む小河川沿いの台地縁辺あるいは低台地に集中するようである。以下、主な古墳または古墳群について簡単にまとめてみたい。

稲荷古墳群(24) 前方後円墳1基と円墳3基が現存する古墳群であり、このうち前方後円墳(2号墳)と円墳1基(1号墳)が、確認調査されている。2号墳は全長32.7mの相似形の周溝をもつ前方後円墳であり、葺石や円筒埴輪列さらには人物、馬、家、盾、靱等の形象埴輪の存在も確かめられている。円筒埴輪や周溝出土の土師器坏から6世紀後葉の年代が推定できるものである。また、径約12mの円墳である1号墳は、川原石小口積の横穴式石室であることが確認され、出土



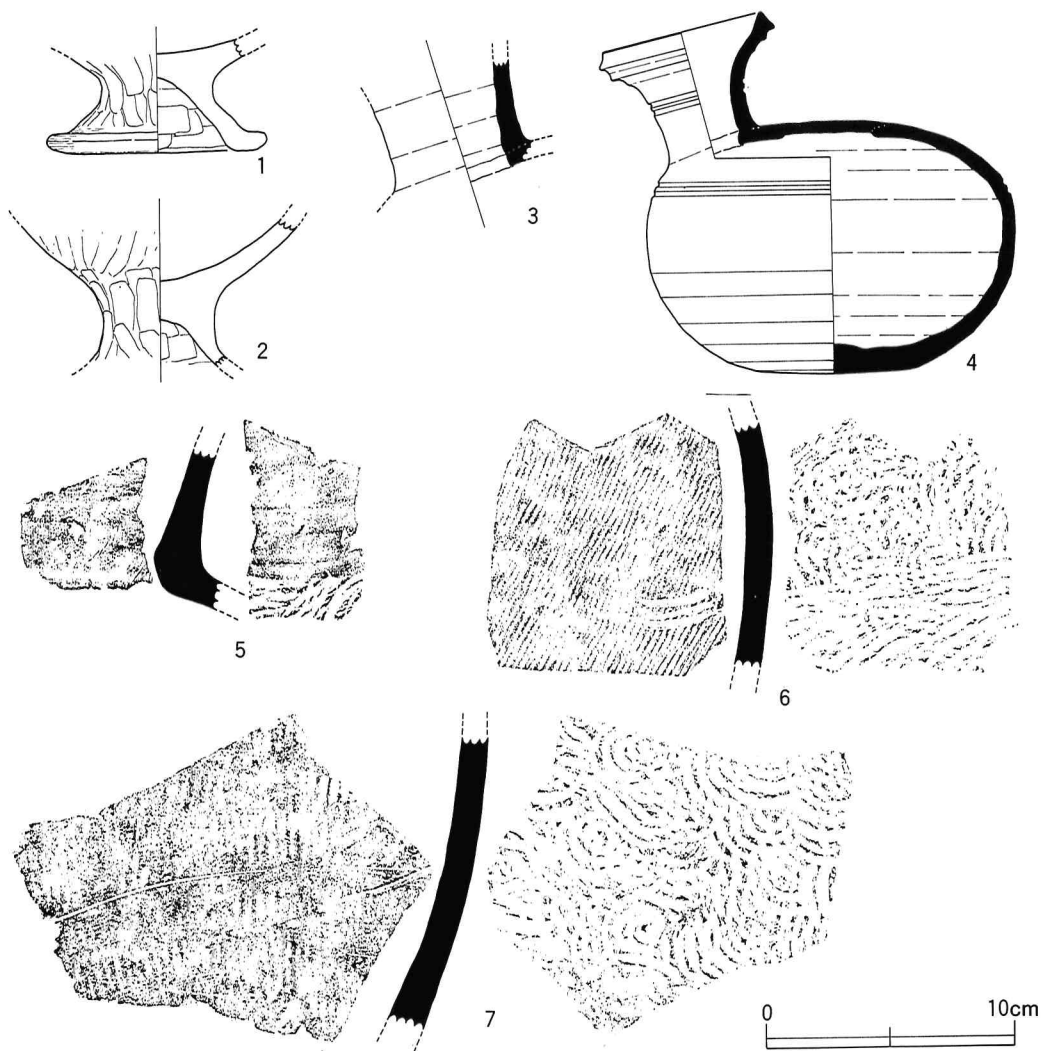
第1図 周辺の遺跡 (1:25,000)

番号	遺跡名	種別	時期	備考
1	長峰遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安	
2	亀ヶ窪古墳群	古墳群	古墳後期	円墳4。
3	植の内古墳	円墳	古墳	
4	宿坪遺跡	集落跡	古墳	
5	並塚遺跡	集落跡	古墳	
6	ヤシカ遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	
7	主計内遺跡	集落跡	奈良・平安	
8	下砥上愛宕塚古墳	円墳	古墳後期	横穴式石室。
9	ひのき内遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安	
10	下砥上古墳群	古墳群	古墳後期	前方後円墳1，円墳2。
11	下砥上下の内遺跡	集落跡	縄文・古墳	
12	西川田遺跡	集落跡	奈良・平安	
13	西の内遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安	
14	辻の内遺跡	集落跡	縄文・古墳～中世	昭和53年発掘。竪穴住居，掘立建物等検出。
15	上欠遺跡	集落跡	縄文中期	昭和53年発掘。竪穴住居，土坑等多数検出。
16	上欠南遺跡	集落跡	縄文前期	昭和60年発掘。竪穴住居1，土坑1。
17	初網遺跡	集落跡	縄文中～晩期	
18	富士山台遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良・平安	
19	高尾神遺跡	集落跡	縄文中期	昭和49年～50年発掘。竪穴住居，土坑等検出。
20	亀岡前古墳群	古墳群	古墳後期	円墳5。
21	亀岡坪遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	
22	定使古墳	円墳	古墳	
23	杳掛遺跡	集落跡・古墳	古墳・奈良・平安	円墳1。
24	稻荷古墳群	古墳群	古墳後期	昭和59年発掘。前方後円墳1，円墳3。
25	犬飼城跡	城館跡	中世	根古屋城ともいう。
26	下欠北原遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	
27	亀塚古墳	前方後円墳	古墳	竪穴式石室。円筒埴輪。前方後円墳。
28	大明神遺跡	集落跡	古墳・奈良・平安	
29	下台原古墳群	古墳群	古墳後期	前方後円墳1，円墳11。円筒埴輪。
30	高田遺跡	集落跡	縄文・古墳	
31	岩石北遺跡	集落跡	縄文・古墳	
32	岩石南遺跡	集落跡	縄文後期・弥生	
33	谷頭遺跡	集落跡	縄文中・後半期	
34	京光地遺跡	集落跡	縄文中期	
35	堀の内遺跡	集落跡	縄文中～後・弥生・古墳	
36	深津城	城館跡	中世(永録)	中城ともいう。
37	深津古墳群	古墳群	古墳後期	前方後円墳1(円筒・人物埴輪)，円墳1(かつては10)
38	工業団地東古墳群	古墳群	古墳後期	円墳4。
39	前橋遺跡	集落跡	縄文中～晩期	
40	植内遺跡	集落跡	弥生・古墳・奈良・平安	
41	大塚古墳群	古墳群	古墳後期	前方後円墳1，円墳3。

第1表 周辺の遺跡一覧表

した土器から2号墳より後の築造と推定されるものである。本遺跡に最も近い前方後円墳を含む古墳群であるとともに、姿川上流域ではこの前方後円墳が恐らく北限であるという点も注目される場所である。

深津古墳群 (37) 本遺跡の西方1.5kmに所在する古墳群である。かつては、十数基からなる古墳群であったといわれるが、このほとんどが消滅し現在は2基を残すのみである。このうちの1基が本古墳群の主墳とみられる通称愛宕塚古墳である。現状は、高さ約3mで、周囲が農耕と宅地化で削られていることもあり、平面形は25m×20mほどの南北に長い楕円形をなしている。墳形については従来から円墳とされているが、墳丘斜面の状況からすると南側に短い前方部が存在した可能性も考えられるものである。仮りに円墳であったとしても、削平状況等を考慮に入れる



第2図 深津愛宕塚古墳出土土器 (湯澤通有氏蔵)

と径30m前後にはなるものとみられ、周辺地域においては有力な古墳の一つであったとみて間違いないであろう。現在、墳丘及び周辺には埴輪や須恵器の小片が散布しているが、かつてこの古墳から出土したといわれる土器や埴輪片を地元の湯澤通有氏が所蔵されている。第2図はその一部を示したものである。1・2は土師器の高坏である。いずれも矮小化した脚部を有する形態のものであり、脚部外面の面取り状のヘラケズリが特徴的である。4は須恵器の平瓶である。扁平で丸味のある体部と二段の稜をめぐらし比較的鋭いつくりの口縁部が特徴である。体部上半には自然釉がかかり、暗灰色で堅緻な焼き上がりの優品である。3も同器種はやや大型品と考えられる。5～6は須恵器の甕の破片であり、5が口頸部、6が胴部中程、7が胴下半部のものである。いずれも外面には平行タタキ目、そして内面には同心円状の圧痕を明瞭に残している。なお、これら土器類のほかにも人物埴輪、円筒埴輪片等の出土があったことも知られている。現在円筒埴輪の好資料に恵まれないが、出土土器等からは7世紀前半代の様相が窺える。

下台原古墳群(29) 本遺跡の南方1.5kmに所在し、前方後円墳1基、円墳11基が現存する古墳群である。主墳である下台原古墳は基壇状のテラスを有する前方後円墳であり、墳丘長57m、基壇長69m、周溝を含めた全長92mという規模をほこるものである。また、円墳も径20m前後の比較的大きなものが多く、群の南端近くには径30mほどの大型円墳が1基認められる。下台原古墳には円筒埴輪が伴うが、主体部や他の出土遺物については不明である。

亀塚古墳(27) 本遺跡の南方2km、前記した下台原古墳群の南東0.5kmに所在する。前方部が削平され後円部だけを残す前方後円墳である。現存する後円部は高さ4m、径30m前後あり、少なくとも50mはこえる前方後円墳であったと考えられる。現在、後円部墳頂近くにおいて割石を小口積にしたような石室壁の一部をみることができる。位置的にも堅穴式石室の可能性が強いものである。円筒埴輪、須恵器、土師器等の出土が知られている。

以上のほかにも、凝灰岩切り石積みの横穴式石室が開口する下砥上愛宕塚古墳(8)、小規模な前方後円墳を含む下砥上古墳群(10)や大塚古墳群(41)、さらには小円墳だけから構成される亀ヶ窪古墳群(2)、亀岡前古墳群(20)、工業団地東古墳群(38)など、それぞれに特徴的なあり方を示している。

さて、このようにみえてくると、本遺跡周辺における古墳の中では、亀塚古墳(27)の主体部にその最も古い要素をみることができる。しかし、これにしても伴出する遺物等からでは前・中期的な色彩を見出すことは困難なものである。小円墳等、未発掘の古墳が大半を占める中での推定ではあるが、概ね本地域の古墳造営は後期に展開すると考えてよいであろう。

参考文献

【宇都宮市史】原始・古代編 宇都宮市史編さん室 昭和53年

【鹿沼市史】前編 鹿沼市史編さん室 昭和43年

【稲荷古墳群】 宇都宮市教育委員会 昭和60年

Ⅲ 調査の経過

1 前年度までの調査概要

(1) 第1次(昭和57年度)の調査概要

昭和57年度は霊園墓地の造成計画に基づき、第1次造成地区である台地南西緩斜面沿い及び霊園への導入路にかかる1・2号墳と経塚とについて発掘を実施した。検出された遺構は、これら2基の古墳と3基の経塚以外に9軒の竪穴式住居跡及び各種土坑である。主な遺構と遺物の特徴は次のとおりである。

住居跡 9軒の竪穴式住居跡は、いずれも古墳時代後期のものである。平面規模はほとんど方形であり、一辺が7.7mの大形のもの(1号住居跡)から1辺3.5mの小形のもの(5号住居跡)と大小様々である。小形の住居跡を除いて総てカマドを有しており、川原石などを焚口の芯として多用しているのが特色である。出土遺物は土師器が中心であるが、須恵器の蓋環(1号住居跡)や手捏ね土器(4号住居跡)、砥石(3号住居跡)などの出土も少ないながらみられる。

古墳 1号墳は、径12m、高さ1.2mの小規模な円墳である。横穴式石室は全長3.9mの袖無形で、奥壁に凝灰岩の切石、側壁に川原石、天井に流文岩の自然石を使用したものである。出土遺物は、石室内から直刀一振とガラス小玉4個、前庭部から土師器杯1個である。また、2号墳は、径18.9m、高さ1.35mのやや大形の円墳である。主体部は2つの長方形土壇であり、このうちのひとつから鉄製の鋏先1点が出土している。他に、墳丘南側斜面から土師器杯9個と須恵器甕1個がまとめて出土している。

土坑 円形あるいは楕円形の土坑が多数検出されているが、遺物を伴うものは少ない。このうち1号土坑とした径1.07m、深さ0.27mの円形土坑からは、縄文中期後半の注口土器が出土している。なお、他の土坑については、大部分が古墳時代の集落に伴うものと考えられる。

経塚 いずれも、径6～7m、高さ1m余りの円錐形の塚である。3つ並んだ真ん中の2号経塚の頂部から経筒が出土している。経筒は銅製で、高さ10.8cmの六角柱状のものであり、「享祿二天二月吉日」の年号が刻まれている。

(2) 第2次(昭和58年度)の調査概要

昭和58年度の発掘調査も霊園墓地の造成計画に先行して実施することとし、主に遺跡が立地する台地の中央部を調査した。検出された遺構は、竪穴式住居跡10軒、土坑5基、その他溝数条である。主な遺構と遺物の特徴は次のとおりである。

住居跡 10軒の竪穴式住居跡は、いずれも古墳時代後期のものである。平面規模、構造等は昨年度調査したものとはほぼ同様であるが、13・14号住居跡では間仕切りの痕跡と考えられる溝が床面に数条検出されている。出土遺物は、土師器が中心である。

土坑 円形のもの4基と方形のもの1基が検出されているが、出土遺物が極めて少ないため時期・性格等については明確でない。しかし、いずれも住居跡群の内部あるいは周辺に位置していることから住居跡に付随したものと考えられる。

子持勾玉 子持勾玉は住居跡群の南側で、地下約40cmの深さから出土したものである。大きさは長さ8.5cm、厚さ3cmで、シルト岩を使用した石製品である。表面が赤褐色に変色していることや剥離状に割れている点から、使用に際して火を受けたものとみられる。残念ながら遺構らしいものは判明しなかったが、周辺にミニチュア土器が出土しており、関連資料と考えられる。

(3) 第3次（昭和59年度）の調査概要

昭和59年度の調査地区は、昨年度の調査地区の南東に続く約1haの部分である。検出された遺構は竪穴式住居跡11軒、古墳1基、土坑5基である。主な遺構と遺物の特徴は次のとおりである。

住居跡 11軒の竪穴式住居跡の内訳は、縄文時代前期が3軒、古墳時代後期が4軒、奈良時代が4軒である。縄文時代前期のものは、3軒とも南北に主軸をとる隅丸長方形の平面形であり、規模は大きいものから6.7×4.8m、6.1×4.1m、4.8×4.2mである。いずれも、住居内に炉を有し、支柱穴は6本である。古墳時代後期のものは、前年度までのものと同様なものであるが、カマドに対面する壁中央にいわゆる張り出しピットを有するものが2軒(24・25号住居跡)みられる。奈良時代のものは、古墳時代後期のものに比較していずれも小規模なものであり、平面形も東西にやや長い長方形となっている。出土遺物は土師器と須恵器であり、墨書のある土師器坏が2点検出されている。

古墳 調査したのは、將軍塚古墳の南にある6号墳である。径15m、高さ0.5mの円墳であり、主体部は横穴式石室である。周溝には埋葬に使用されたと考えられる3つの土坑がみられる。いずれも長方形で、片側が斜めに掘り込まれているのが特徴である。出土遺物は、主体部からはまったく無かったものの、墳端部から周溝にかけて多数の土師器、手捏ね土器、須恵器が検出されている。また、周溝内土坑のうち1号土坑としたものの直上からは、直刀2振、小刀1振、轡一式がまとめて出土している。

2 本年度（昭和60年度）の調査概要

(1) 調査計画

霊園の造成対象地区面積は、約12haに及び広大なものである。そこで、この造成計画策定に当たっては、①遺跡は極力保存するよう土の移動は最小限におさえる、②遺跡の保存状態が良好と考えられるところは緑地や広場として保存するという2点の方針を定めた。さらに、この対象地区内には、③既にローム層の深い部分まで現状変更が行われ遺構の壊滅が確実なところ、④急傾斜地で現状変更の及ばないところがある。従って、以上4点から実際の発掘調査対象面積は、造成対象地区面積の半分の約6haということとした。また、調査期間については、造成計画に先行して現地での発掘調査を終了することを原則とし、5か年と定めた。

この5か年計画の第4年次である本年度は、年度別造成計画の順に従って、主に昨年度調査地区に続く南東部約8000㎡を調査対象地区とした。なお、今回の調査対象地区内には、將軍塚古墳の周溝部が含まれており、この周溝調査にかなり時間を費すものと予定された。

(2) 調査経過

前年度までと同様、4月中旬から発掘調査を開始し、12月中旬まで行った。調査期間中、市内の他遺跡において緊急の調査があったため、本遺跡の調査が一時中断あるいは人員が半減したが、例年になく天候に恵まれたこともあり、ほぼ予定した面積の調査を完了することができた。

なお、主な遺構の調査期間は、次表のとおりである。

昭和60年 遺構名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
将軍塚古墳	—————								
36号住居跡	——								
37号住居跡			——						
32号住居跡				——					
33号住居跡					——				
34号住居跡						——			
35号住居跡							——		
土坑・溝等								—————	
17号住居跡									——
次年度調査地排土							—————	—————	

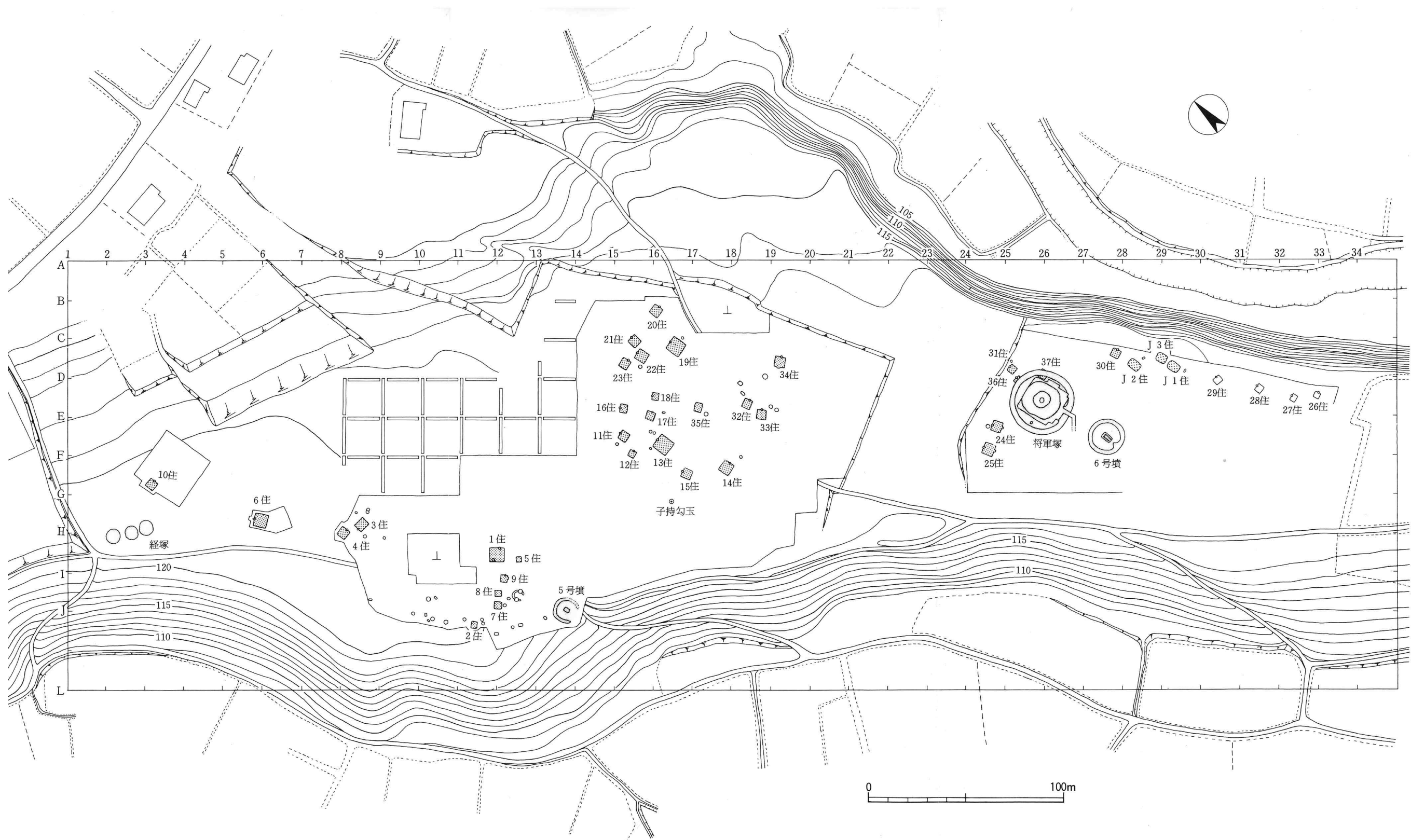
(3) 検出された遺構と遺物の概要

今回の調査で検出された遺構は、古墳時代後期の竪穴式住居跡7軒、將軍塚古墳の周溝全部、土坑6基、溝1条である。これらのうち將軍塚古墳の周溝調査および30号住居跡（昨年度調査したもの）、36号住居跡、37号住居跡については、次章で詳しく報告するものとし、それ以外の遺構・遺物について簡単にまとめておくこととしたい。

32～35および17号住居跡は、いずれも古墳時代後期の住居跡であり、前年度までに検出された同時期の住居跡と規模の面でも構造の面でもあまり変るところは認められない。ただし、35号住居跡はやや異質であり、平面形が長方形を呈しカマドのかわりに炉を有するものである。なお、出土遺物は土師器が中心であり、まれに須恵器片や砥石がみられる。

土坑は、形態上円形と長方形に大きく分かれる。数的には円形のものが多いわけであるが、住居跡群の中における配置上で両者を分けて考えるべき要素は認められない。出土遺物が無いものが大半を占めているため、時間的なことについては考慮できないが、恐らくは両者併用という形で住居群内に配置され、機能したものと考えられる。

溝は検出面が非常に浅いことや覆土の状態が柔らかいことなどから、明らかに後世のものである。近世以後の開墾に関連したものと考えられる。



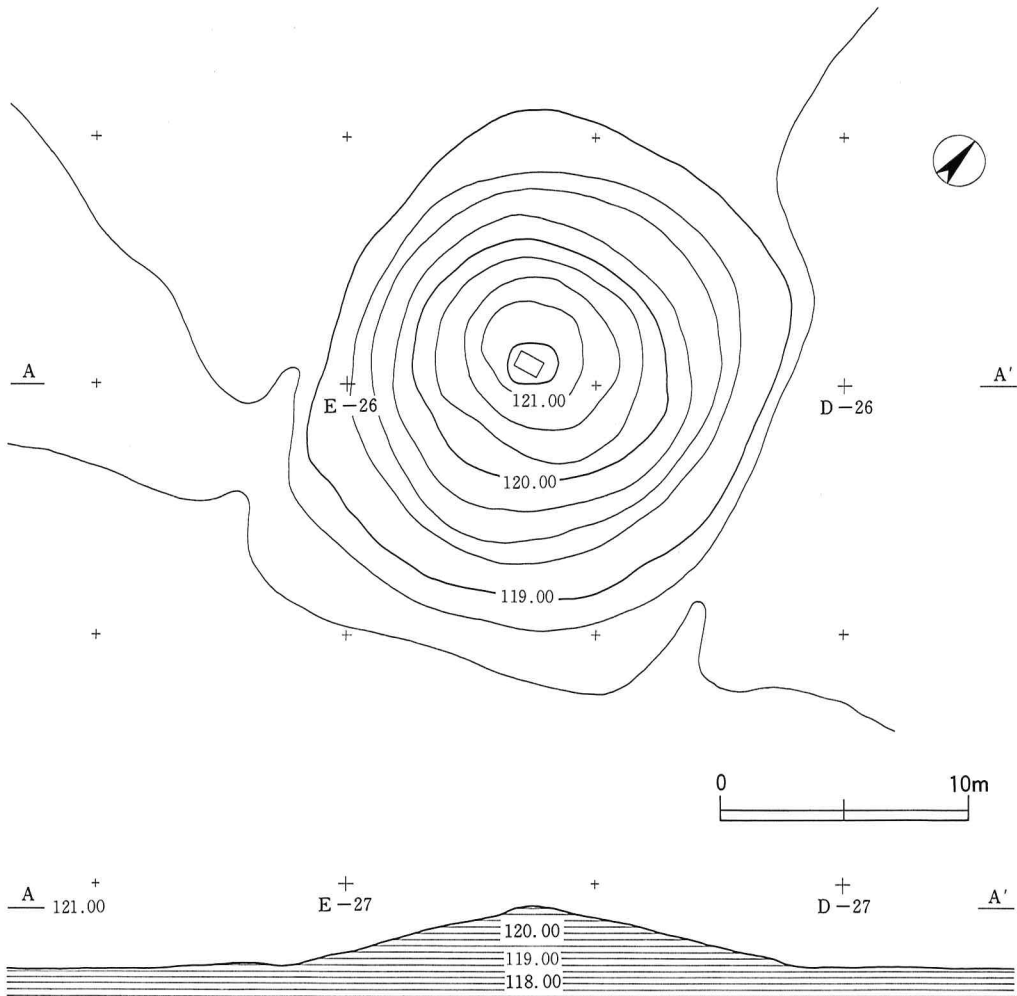
第3図 聖山公園遺跡遺構配置図

IV 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出した遺構は、將軍塚古墳の周溝、17・32～37号住居跡及び土坑・溝等である。ここでは、これらの中から將軍塚古墳、36・37号住居跡及びこの関連上昨年度調査した30号住居跡について、報告するものとしたい。

1 將軍塚古墳

本墳は下図(第4図)に示すと通りの整美な円墳である。墳頂部に氏神を祀る社が置かれていたこともあり、ほとんど破壊を受けずに保存されてきたものと思われる。幸いなことに、今回の霊園造成にあたって、本墳及びこの周辺は「遺跡の広場」として保存される計画である。従って発



第4図 將軍塚古墳墳丘測量図

掘調査も、正確な規模を確認することを目的とし、周溝部分だけを対象にしたものである。

(1) 発掘前の墳丘について (第4図参照)

墳丘は低平な円錐形状を呈し、墳頂の平坦部がほとんどみられない円墳である。東西の墳裾部が一部、浅い溝によって変更されている以外は、ほぼ原形を残しているものとみられる。この現状での墳丘規模は、径が東西で20.5m、南北で21.5m、高さが2.4mである。なお、葺石・埴輪等の外部施設は認めることができないが、墳丘南側斜面には石室の石材と思われる石が一部露呈している。

(2) 周溝について (第6図参照)

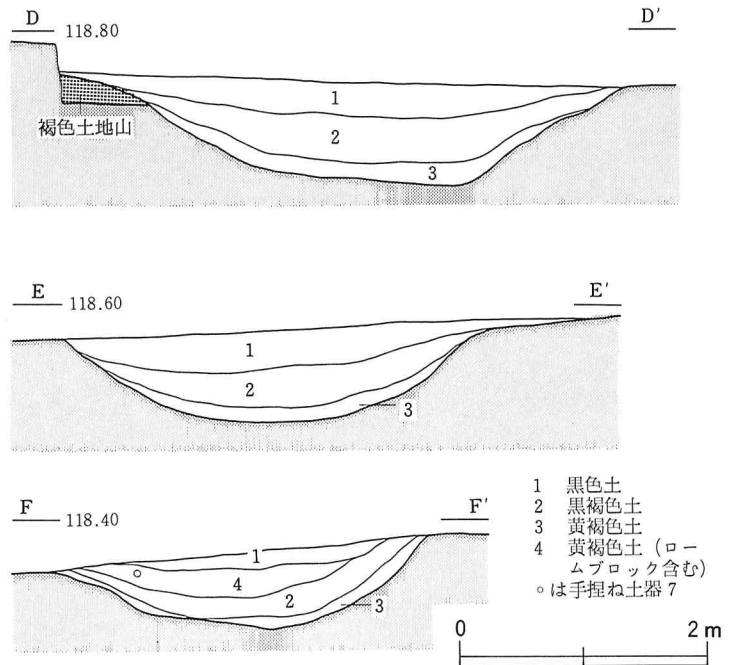
検出面は他の古墳時代後期の竪穴式住居等とほぼ同じであり、表土下黒褐色土層の上面である。覆土は部分的に特異なもの(第5図F-F')もあるが、基本的には上から黒色土、黒褐色土、黄褐色土の3層に分かれている。

平面形と規模 平面形は、整った円形をなさない。特に東南部から南部にかけての形状は、円弧を描かず、鈍角に屈曲しているかの感を呈している。このため全体からみると、南東部がやや張り出した円形となっている。周溝を含めた平面規模は、南北径が34.6m、東西径が34.7m、そして張り出した部分を通る径が36.6mである。また、周溝の内側を墳端部としてみた場合の平面規模は、南北径が29.9m、東西径が30.0m、そして張り出した部分を通る径が31.1mである。

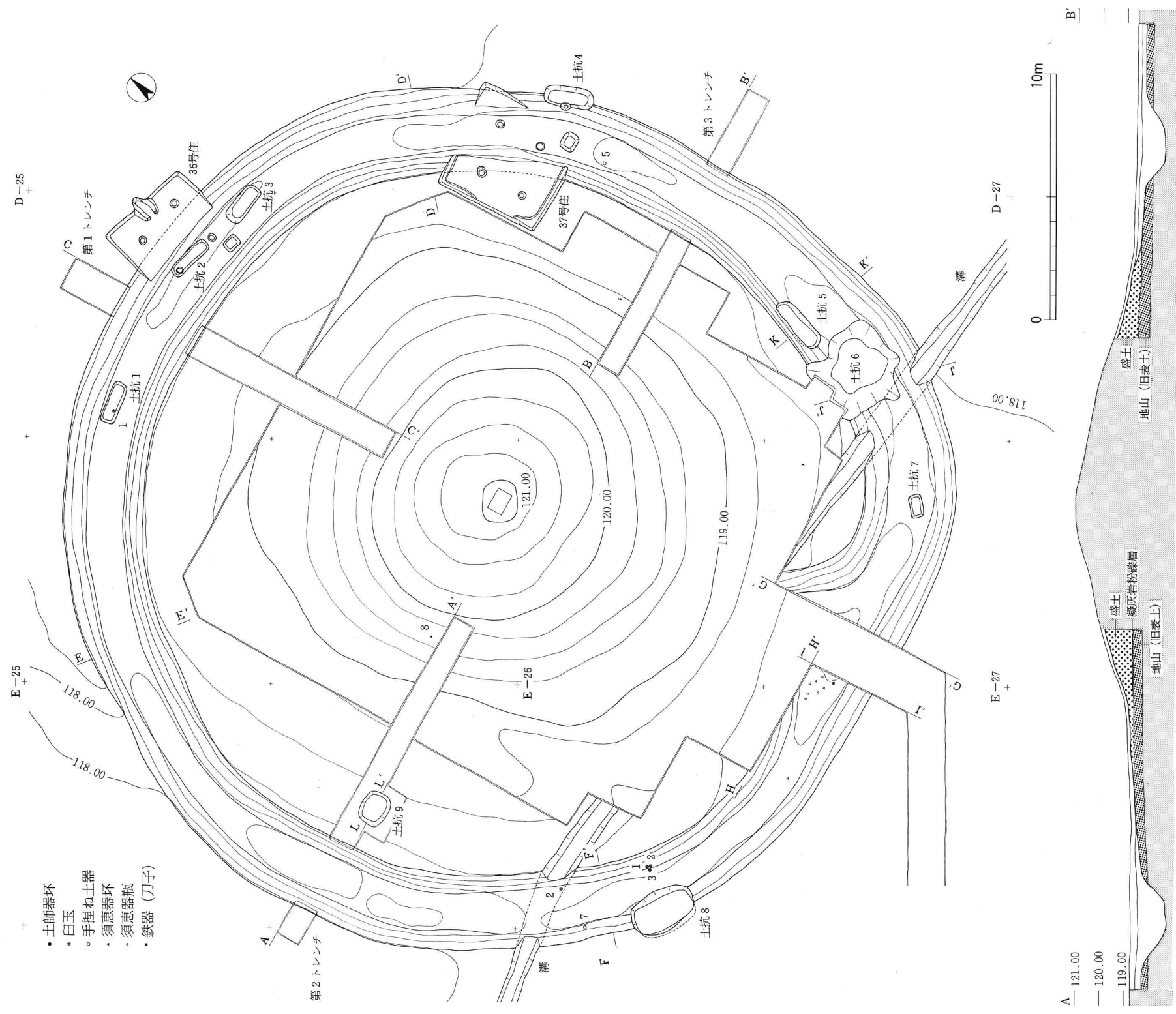
幅と深さ 幅は西側に対して東側が全般にやや広がっている。最も狭くなるのは、南西部から前庭部にかけてであり、確認面での幅が2.7m前後である。また、最も広がるのは、南東部

から前庭部にかけての部分であり、確認面での幅が3.8m前後となっている。深さは、この幅の広さにほぼ相関し、南東部から前庭部にかけてが最も浅くなり50~60cm、東側が全体に深く80cm前後となっている。なお、溝の掘り方は、幅が広く深さもある東側では底面が平坦に近くなり断面が逆台形型となるが、逆に幅が狭く深さも浅い西南部では、鍋底状の丸い底面である。

前庭部 内部主体の調査は実施していないため、正確には前庭部に向う周溝部分である。

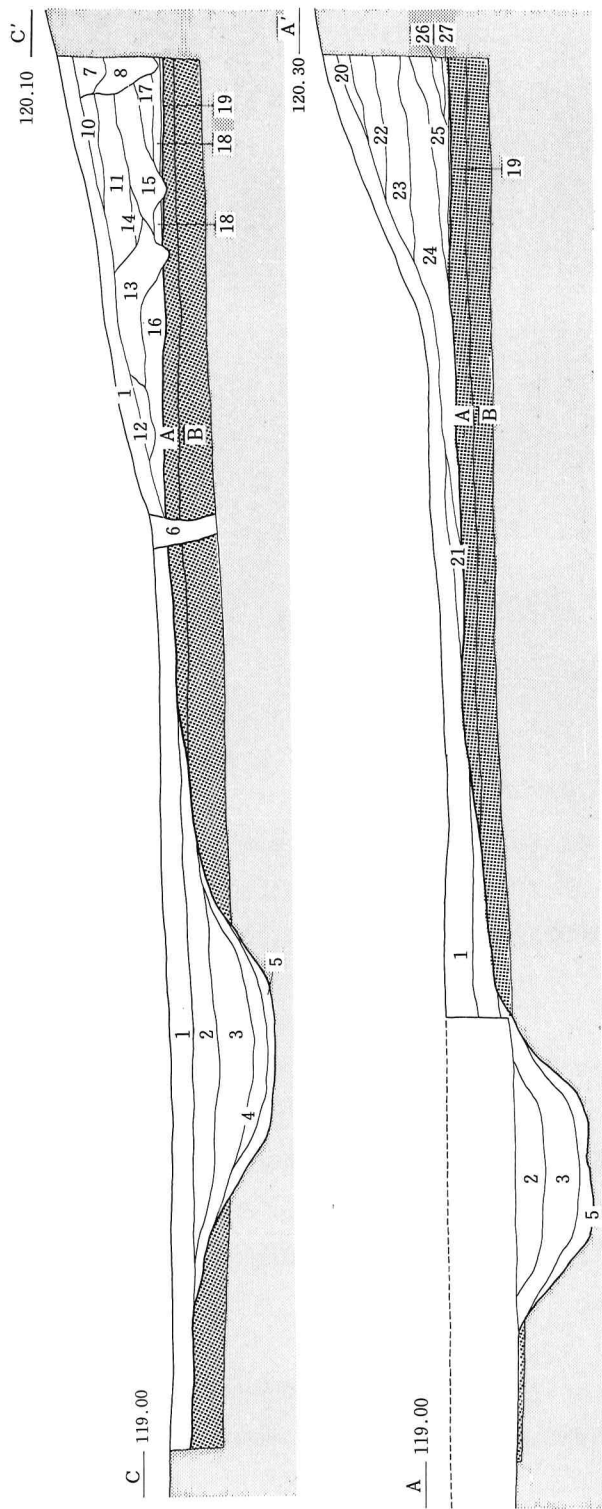


第5図 將軍塚古墳周溝断面図

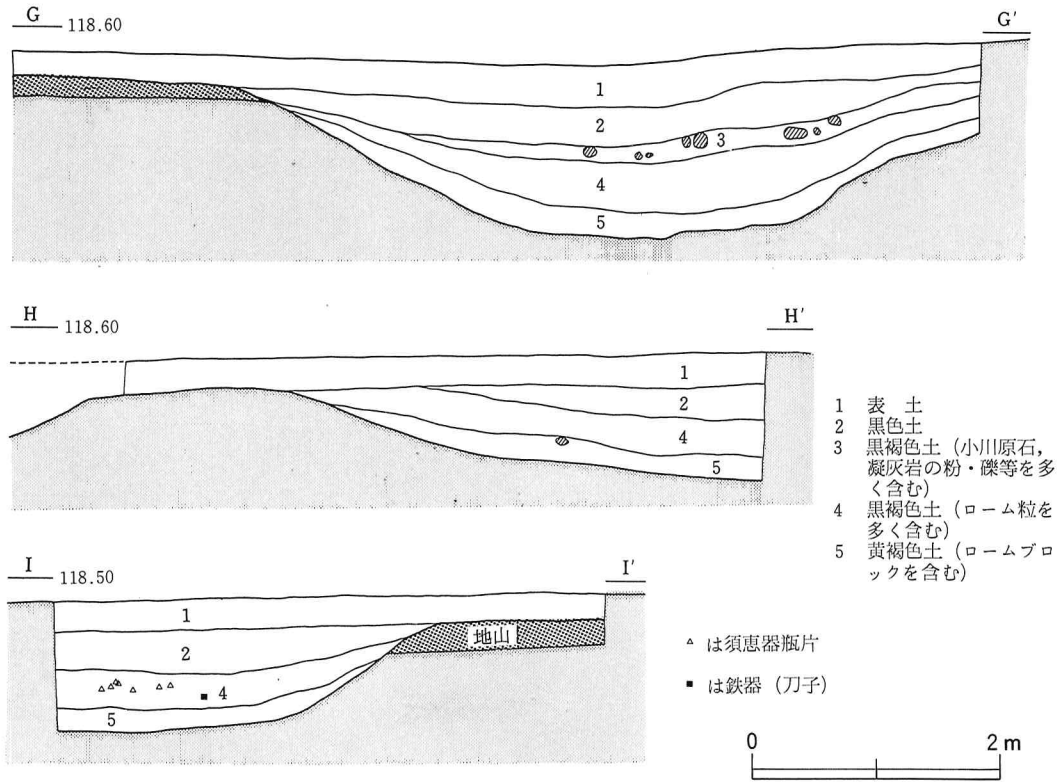


- 土師器環
- 白玉
- 手捏ね土器
- 須恵器環
- 須恵器瓶
- 鉄器 (刀子)

第6図 將軍塚古墳全体図



- 第7図 將軍塚古墳墳丘断面図(上 第1トレンチ東壁, 中 第2トレンチ北壁, 下 第3トレンチ北壁)
- 1 表土
 - 2 黒褐色土
 - 3 黒色土
 - 4 黒褐色土
 - 5 黄褐色土
 - 6 褐色土(攪乱)
 - 7 褐色土
 - 8 黄褐色土(攪乱)
 - 9 褐色土
 - 10 褐色土
 - 11 褐色土(ロームブロック多量)
 - 12 褐色土
 - 13 明褐色土
 - 14 褐色土
 - 15 黄褐色土(ロームブロック多量)
 - 16 黒褐色土(小ロームブロック)
 - 17 黒褐色土
 - 18 褐色土
 - 19 黒色土(凝灰岩の粉・礫多量)
 - 20 褐色土
 - 21 褐色土
 - 22 黄褐色土(ロームブロック多量)
 - 23 褐色土(ロームブロック)
 - 24 黒褐色土(ロームブロック少量)
 - 25 黄褐色土(ロームブロック多量)
 - 26 褐色土
 - 27 黄褐色土(ロームブロック)
 - 28 褐色土
 - 29 黄褐色土(ロームブロック)
 - 30 黒褐色土
 - 31 褐色土
 - A 黒色土地山
 - B 褐色土地山



第8図 將軍塚古墳前庭部付近周溝断面図

位置的には、ほぼ南にあたる周溝部分が20～30cm程深まり、内側が墳丘中心部に向って折れ曲っているものである。恐らく、徐々に浅くなるとともに幅を減じながら横穴式石室の入口へと通じる溝状の遺構と考えられる。なお、この溝の周溝との取り付け部での幅は、推定で8～9mである。

(2) 墳丘について

墳丘の北・東・西に入れた第1～3トレンチの断面により、墳丘構築状況の一部が窺い知れる(第5図)。墳丘西の第2トレンチ部分では、裾部が恐らく耕作によると思われる削平を受けていることが断面からも確認できるが、第1・第2トレンチ部分は、ほぼ原形をとどめているものとみられる。これによると、周溝から3cm前後内側より盛土がなされていることが判る。この部分は地山がかなり緩やかな傾斜で削り上げられた状況であり、平面的には墳丘盛土部分と周溝の間を基壇状に取り巻いていたものと考えられる。

(3) 内部主体について

墳丘内の主体部についての調査は実施しなかったわけであるが、その構造を窺わせる何点かの所見がみられる。一つには、前述した南側周溝部の状況であり、恐らくこれを前庭部とした横穴式石室であることは間違いのないものと考えられる。また、その石材を考える上で、前庭部周溝の中程の層から多く出土した凝灰岩の礫(第8図G-G'参照)が参考となる。さらに、墳丘部に入れ

た第1・2トレンチからは、中心部近くの旧表土上面に凝灰岩の粉礫を多量に含む層が検出されている(第7図19層)。恐らく、石材加工に伴って出た削り屑や割れ屑をばらまいたものとみられる。以上のようなことから、凝灰岩のしかも切り石を使用した可能性のある横穴式石室であると推定できる。

(4) 土坑について

周溝内からは、8つの土坑が検出されている(第6図参照)。各土坑の大きさと特徴をまとめると次のとおりである。

土坑1 北側周溝の外壁寄りから検出された、175×63cmの長方形土坑である。周溝底面からの深さは約10cmであり、黄褐色土の覆土中より滑石製の白玉1個が検出されている。

土坑2 やはり北側周溝の外壁寄りから検出された。185×58cmの長方形土坑である。周溝底面からの深さは13cmであり、出土遺物はみられない。

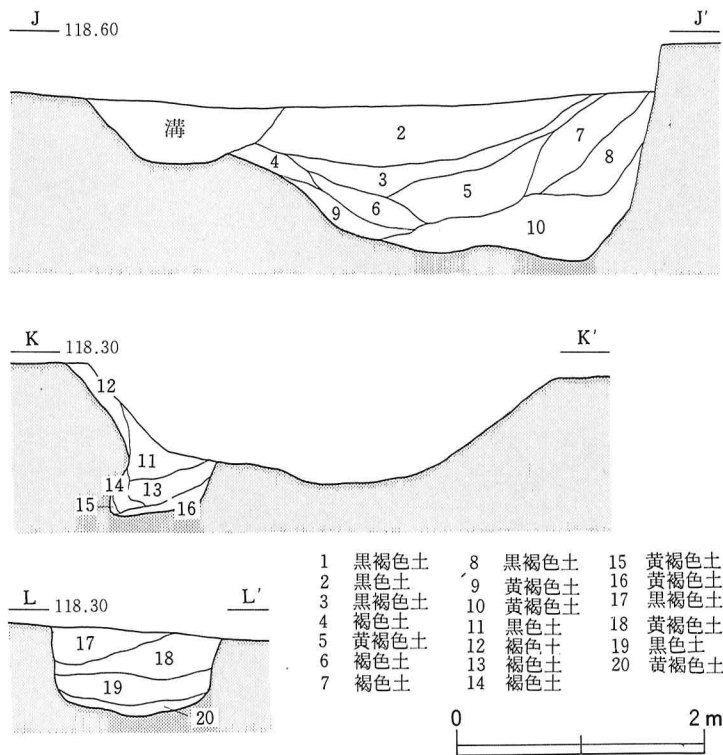
土坑3 土坑2のすぐ東から検出された、172×75cmの長方形土坑である。周溝底面からの深さは13cmであり、出土遺物はみられない。

土坑4 東側周溝の外縁から検出された、205×83cmの長方形土坑である。周溝外縁部確認面からの深さは65cmであり、出土遺物はみられない。なお、土坑西壁の中央部に径40×30cm、深さ30cmのピットが検出されている。土坑に関連したものと考えられる。

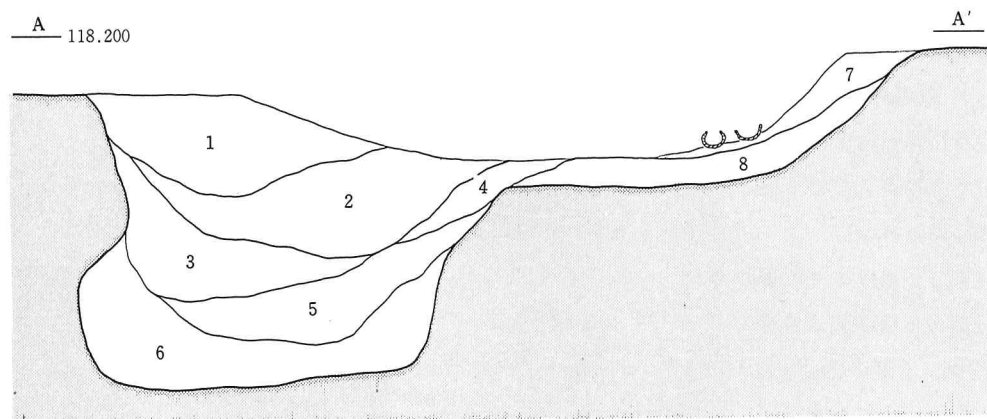
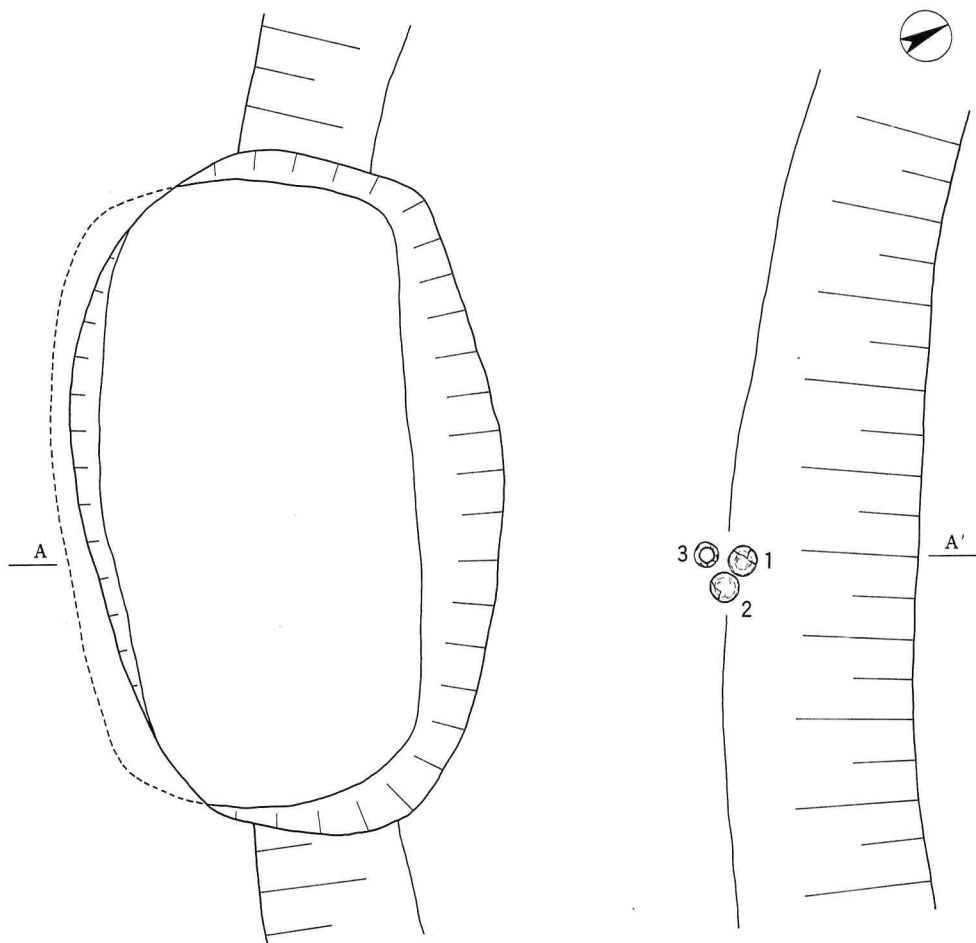
土坑5 東側周溝の内壁から検出された、225×75cmの長方形土坑である。断面(第9図K-K')で判るとおり内壁方向に斜めに掘られたものであり、周溝底面からの深さは約40cmである。

確認面は周溝底面より上層であり、周溝がある程度埋ってから掘り込まれたものと考えられる。なお、出土遺物はみられない。

土坑6 土坑5のすぐ南側で周溝のほぼ中央より検出された、3.5×4m程の不整形な大形土坑である。周溝底面からの深さは70～80cmであり、底面、側面と



第9図 將軍塚古墳土坑断面図(上 土坑6, 中 土坑5, 下 土坑9)



- | | | |
|------------------|------------------|--------|
| 1 黒色土 | 4 褐色土 | 7 黒褐色土 |
| 2 黒褐色土 | 5 褐色土 | 8 黄褐色土 |
| 3 黄褐色土 (ロームブロック) | 6 黄褐色土 (ロームブロック) | |



第10図 将軍塚古墳土坑 8 及び土器出土状態

も凹凸が著しい。断面（第9図J-J'）から、この土坑は埋めもどされ周溝の底面として整形されたことが窺える。恐らく、ローム土採掘のための坑と考えられる。

土坑7 東南部周溝の外壁寄りから検出された、95×55cmの長方形土坑である。周溝底面からの深さは15cmであり、出土遺物はみられない。

土坑8 南西部周溝の外縁から検出された、275×173cmの長方形土坑である。断面（第10図A-A'）からも判るように、周溝の外側に向って斜め（横穴状）に掘り込まれたものであり、周溝底面からの深さは85cm、周溝検出面からの深さは115cmである。土坑検出面での平面形は、やや楕円形気味であるが、底面は252×142cmの長方形となっている。確認面は、周溝覆土の中層であり、周溝がある程度埋没してから掘り込まれたものである。このことは、この土坑の北側に恐らく土坑を掘った時のものと思われるロームブロックを含む層（第5図F-F'の4層）が残されていたことから判断できることである。なお、断面（第10図A-A'）に現われた第3層は、ロームブロックを非常に多く含む層であり、肩部が崩落したものとみられる。従って、ある程度天井部と言えるものを掘り残した横穴状のものが、本来の形であったのかもしれない。

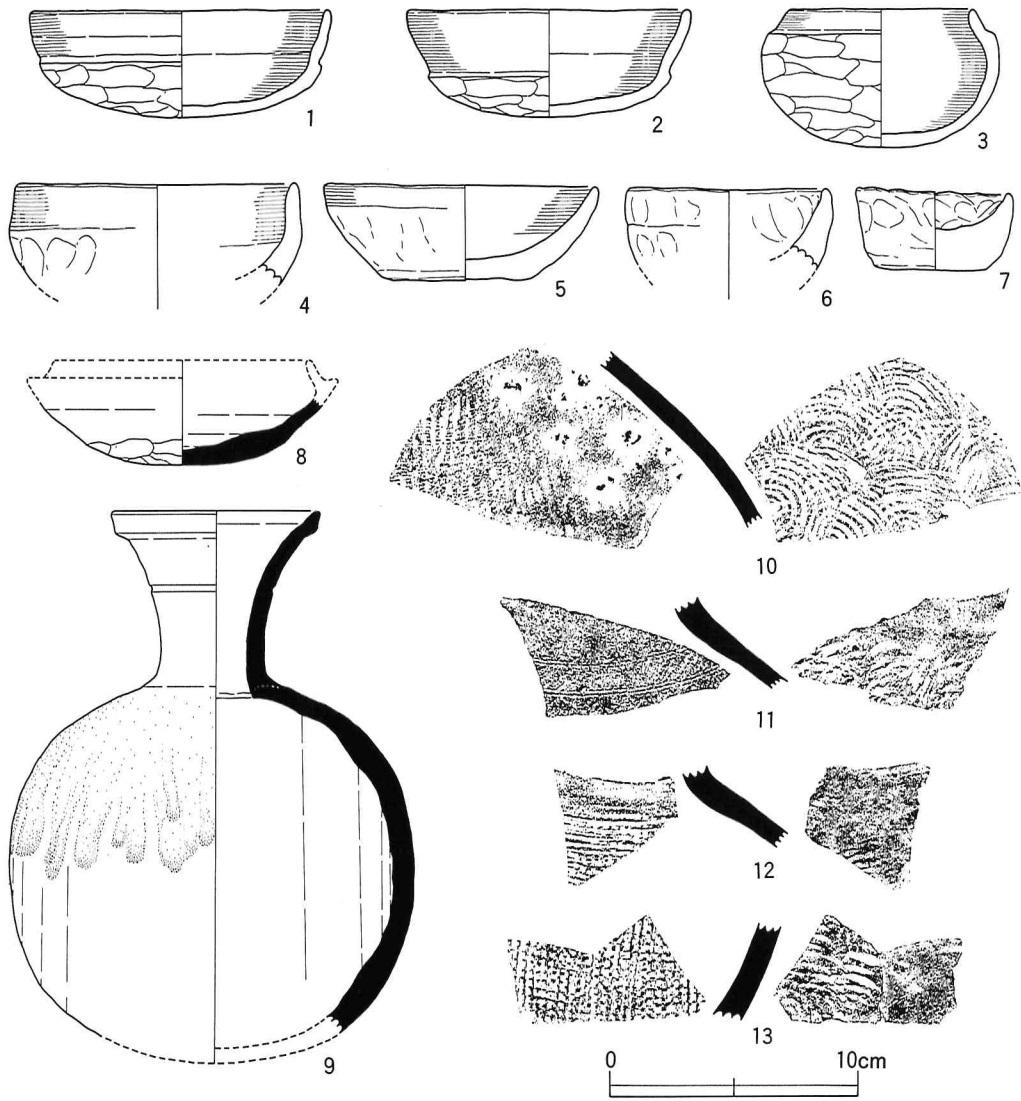
土坑9 西側墳丘裾部から検出された、140×115cmの隅丸長方形土坑である。検出面からの深さは70cmであり、出土遺物はみられない。確認面の状況から古墳以前の住居群に関連する土坑と考えられる。

以上のように土坑6と9を除けば、いくつかの共通点が認められる。まず、その平面形をみれば、土坑7がやや小型であるが、いずれも等身大以上の長さをもつ長方形である。また、これらは周溝範囲内に位置し、その長軸（主軸）方向は周溝方向に沿っている。時期については、確認面が不明確な場合が多いことや出土遺物がほとんどないことから決定し難いが、土坑5や8の状況からみれば、そのほとんどは周溝がある程度埋没した後、すなわち古墳築造後しばらくたってから掘り込まれたものと判断できる。さらに、土坑5や8にみられる斜めに掘り込んで横穴状にするという構造的な特徴は、これらが、たまたま周溝壁のロームを切り込んだため残りが良かったと考えれば、他の底面近くのみしか検出し得なかった土坑についても共通したものであったとも推定できる。

(5) 遺物について

土器（第11図）1～3は、土坑8の北東約1mの周溝内側寄りから、3点まとまって検出された土師器である（第10図参照）。出土層位は周溝底面上15cmの黄褐色土層上面であり、土坑8の設置に関連して使用されたものである可能性が高いものである。1・2は体部外面に稜をもって口縁部が内湾気味に開く坏であり、底部外面がヘラ削りされる以外は総て横ナデ仕上げである。3は口縁部が短く内傾する短頸壺であるが、調整技法は2点の坏と全く同一である。

4～7は、周溝覆土中から検出された手捏ね土器である。5は土坑4の南西約2.5mの黒褐色土層中（周溝底面から約20cm上）より、7は土坑8の北東2mの黄褐色土層中より（第5図F-F'参照）、また4・6の破片は7の周辺より、それぞれ出土したものである。4・5の口縁部に横



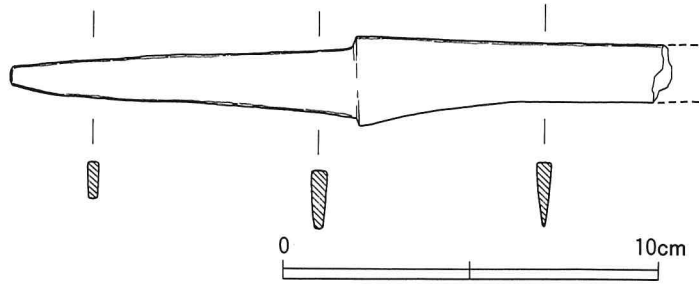
第11図 将軍塚古墳出土土器

ナデがみられる以外は、いずれも手捏ねの手法のみによる仕上げである。

8～13は、須恵器である。8は、墳丘の西側斜面から表採した坏底部であり、蓋受部と短く内傾する口縁部を欠損したものとみられる。底部外面は不定方向のヘラ削り仕上げである。9は、前庭部前面の周溝内覆土中から出土したフラスコ形の長頸瓶である。出土状態は、周溝底面上約30cmの黒褐色土層中に小片となって散乱していたものである（第6図及び第8図I-I'参照）。頸部に一条の沈線が配され、胴部は回転ヘラ削り調整が施される。焼成は良好で、胴部の上半には自然釉の付着がみられる。10～13は、甕の破片であり、いずれも、南側周溝の覆土中から検出されたものである。12, 13は、内面に同心円の圧痕、外面に格子タタキ目痕を残すもので、胎土、

焼成等から同一個体とみられる。なお、10, 11, 12はそれぞれ別個体である。

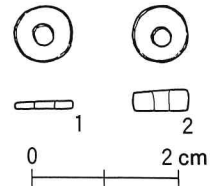
鉄器(第12図) 位置・層位とも9のラスコ形長頸瓶のすぐ近くから出土したものである(第6図及び第8図I-I'参照)。切先部の欠損した、



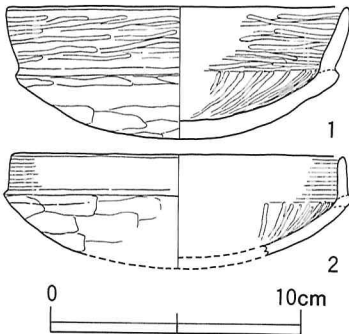
第12図 將軍塚古墳出土刀子

残存長17.5cmの刀子である。茎長9.2cm, 残存刃長8.3cm, 身幅1.5~2.3cmを測り, 両関で茎尻が幅狭となる。刃は平棟平造りで, 棟肉も薄く, 磨減りが著しい。

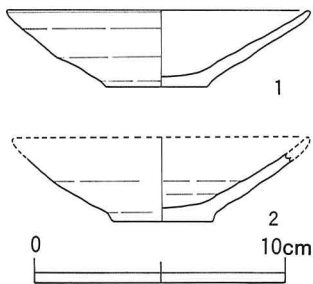
滑石製模造品(第13図) いずれも滑石製の白玉である。1は土坑1の覆土・黄褐色土層中(土坑底面上5cm)から出土したものであり, 径8mm, 孔径2.5mm, 厚さ1mmである。2は土坑8の北約3mの周溝覆土・黒褐色土層中(周溝底面上20m)から出土したものであり, 径7.5mm, 孔径2mm, 厚さ2.5mmである。1は土坑1の中から, また, 2も土坑8に近い位置からの出土ということで, 土坑に関連して使用されたもの



第13図 將軍塚古墳出土白玉



第14図 將軍塚古墳盛土内出土土器



第15図 將軍塚古墳南裾部溝内出土土器

であることが考えられる。

(6) その他の遺物について

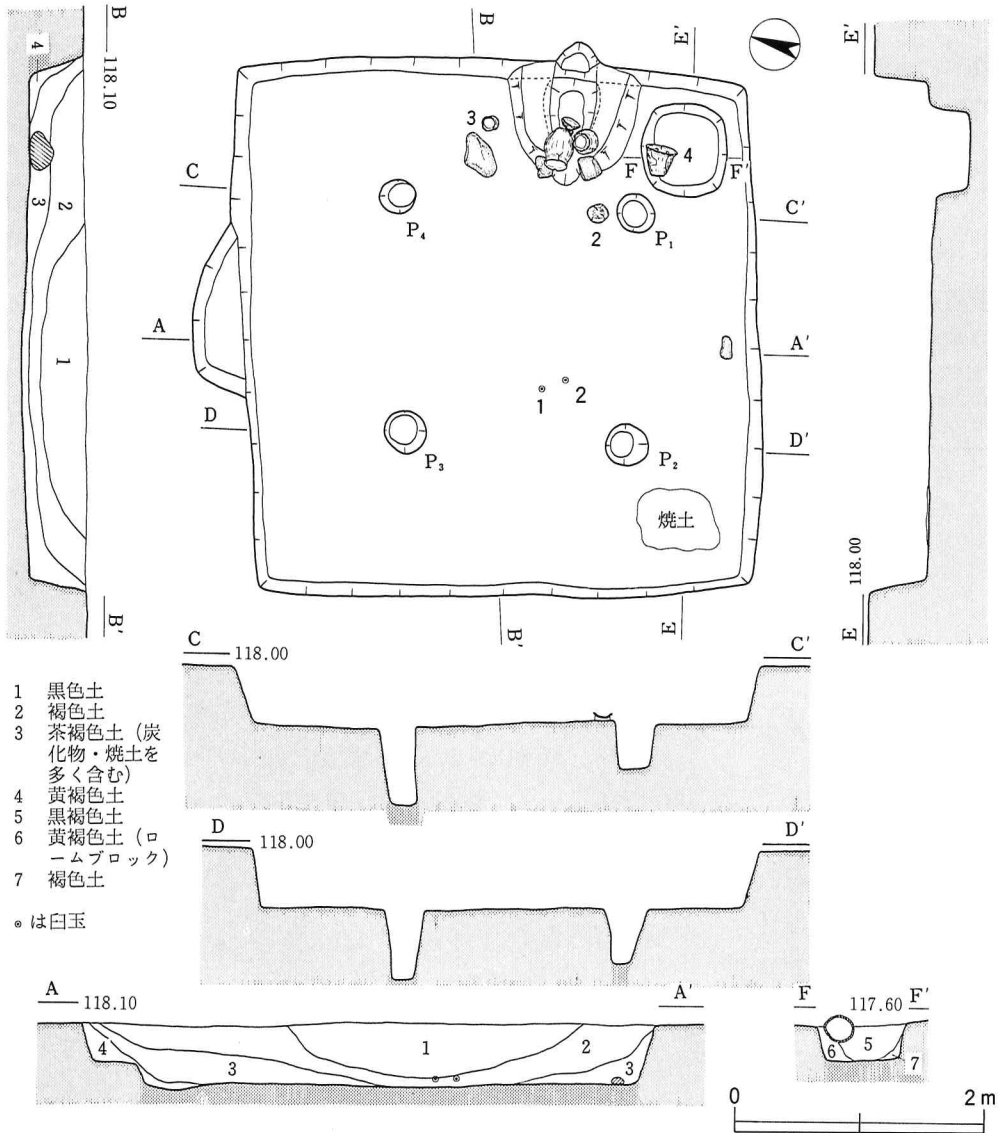
第14図1・2は, 東側墳丘に入れた第2トレンチにおいて, 盛土中より検出された土師器坏片である。1は体部外面に稜をもって口縁部が外に開くものである。底部外面にヘラ削り調整を残す以外は, 総て丁寧なヘラミガキで仕上げられたものである。また, 胎土も緻密であり, 焼成も良好である。2は体部外面に稜をもって口縁部が直立するものである。底部外面をヘラ削り, 底部内面をヘラミガキで仕上げたものであり, やはり緻密な胎土で, 焼成の良い土器である。これらは, 本墳築造の際に破壊を受けたとみられる前代の遺構に伴うものと考えられる。

第15図1・2は, 本墳の南裾部をほぼ東西に走る溝の覆土中から出土したかわらけ土器である。いずれも, ほぼ同形同大の皿形土器であり, 小さな底部と大きく直線的に外へ開く体部が特徴的である。整形にはロクロを使用しており, 底部外面には糸切り痕がそのまま残されている。また, 胎土はやや砂質であり, 明褐色を呈し, 焼成はやや甘い感がある。

2 30号住居跡

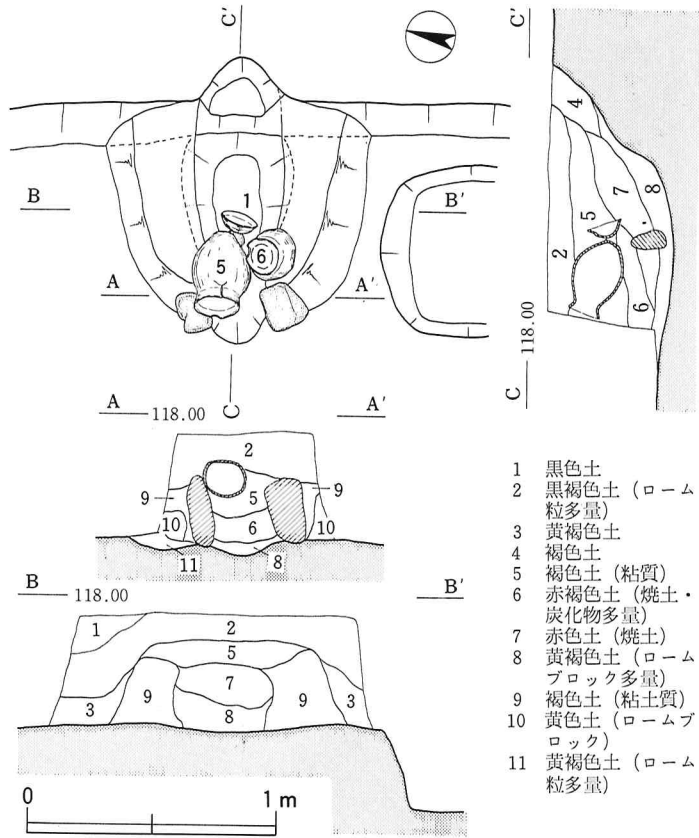
(1) 遺構について (第16・17図)

將軍塚の東南約25mに、1軒孤立した感じで検出されたものである。平面形は4.3×4.2mのやや東西に長い方形である。検出面からの掘り込みの深さは45cmと比較的深く、壁の立ち上がり方も鋭どく70~80度の傾斜をもっている。床面はほぼ平坦であり、支柱穴に囲まれた中央部はかなり堅固に踏み固められている。支柱穴はほぼ対角線上に配された4本であり、それぞれの中心間の長さは、 P_1-P_2 が1.85m、 P_2-P_3 が1.78m、 P_3-P_4 が1.88m、 P_4-P_1 が1.89mである。



また、各柱穴の深さは、それぞれ床面から、 P_1 が38cm、 P_2 が44cm、 P_3 が54cm、 P_4 が61cmとまちまちであり、穴の深さで柱の高さをそろえた様子が窺える。貯蔵穴は、東南コーナーに掘り込まれたもので、75×70cmのやや胴張りの方形プランをもち、床面からの深さは28cmである。

カマドは、東壁のやや南寄りに設けられたものである。煙道は壁の中段から約45度の傾斜をもって登っており、検出面で約20cm壁を切り込んでいる。大きさは、奥行が90cm幅が壁部で105cm、焚き口部で55cmである。袖及び天井部には褐色粘土が使用されており、焚口部は川原石で補強さ



第17図 30号住居跡カマド実測図

- 1 黒色土
- 2 黒褐色土 (ローム粒多量)
- 3 黄褐色土
- 4 褐色土
- 5 褐色土 (粘質)
- 6 赤褐色土 (焼土・炭化物多量)
- 7 赤色土 (焼土)
- 8 黄褐色土 (ロームブロック多量)
- 9 褐色土 (粘土質)
- 10 黄色土 (ロームブロック)
- 11 黄褐色土 (ローム粒多量)

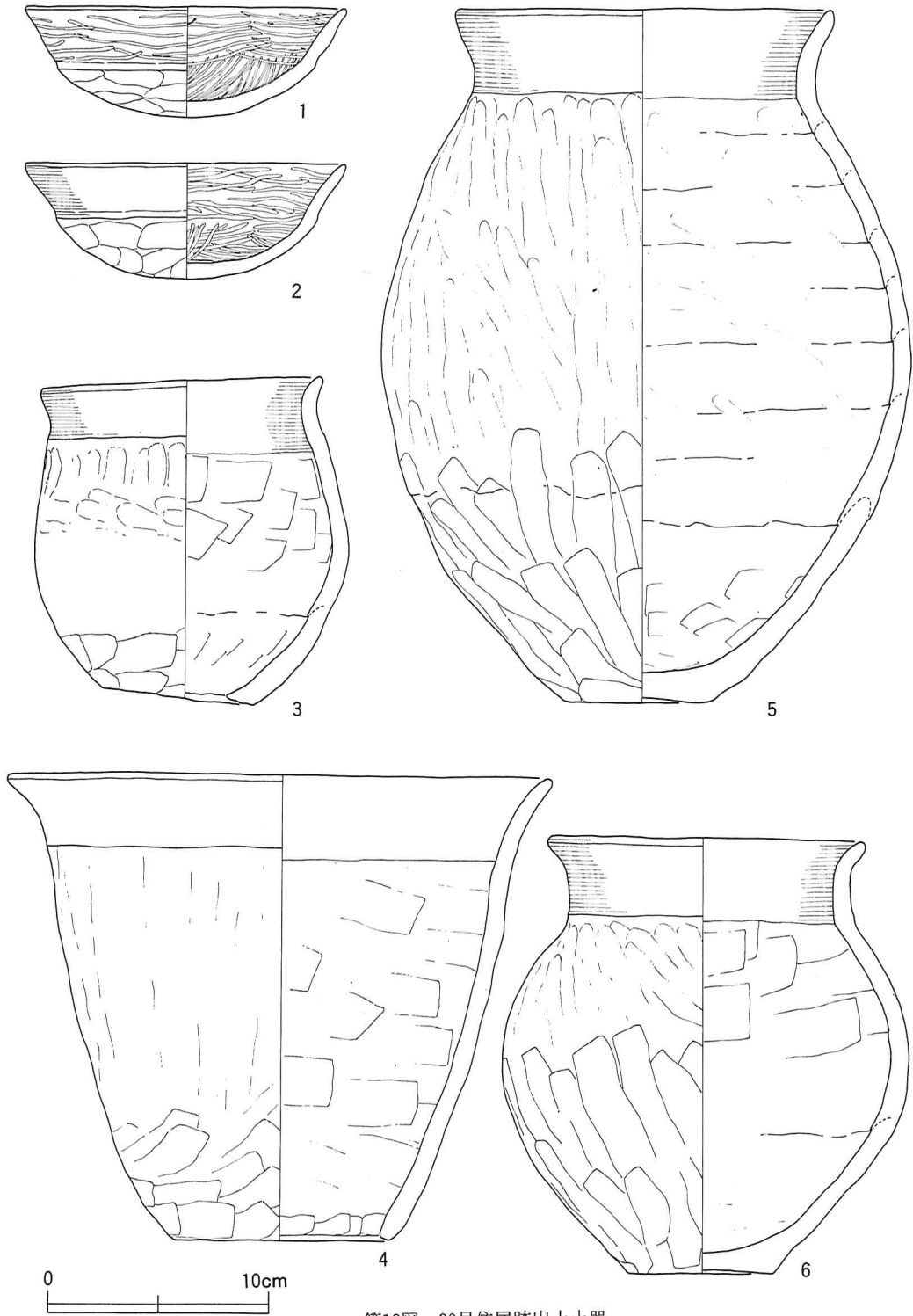
れている。この川原石は、長さ25～30cmの小さいものが2個と長さ40cm近い大きいものが1個の計3個であり、小さい2個の川原石を袖の先端部に立て、そこに大きい川原石1個を渡したものである。なお、この大きい川原石は、カマドのすぐ左脇から検出されている。燃烧部は深さ5～6cmの浅いすり鉢状に床面を掘り窪めたものであり、中心部には支脚に使用された長さ15cm程の川原石が検出されている。

覆土の堆積状況は、ほぼレンズ状を呈する自然堆積であるが、下層(第16図B-B'3層)には炭化物・焼土等が多く含まれ、また南西コーナー近くに焼土が多量に検出されていることから、火災を受けた可能性も考えられる。

(2) 遺物について

本住居跡から検出された遺物は、土器と滑石製模造品である。

土器(第18図) 検出されたのは総て土師器であり、そのうち図示し得たのは坏2点(1・2)、甗2点(3・4)、甕2点(5・6)の計6点である。それぞれの出土状態は次のとおりである。1・5・6はカマドから検出されたものであり、1はカマドの燃烧部内に転落したもの、5はカマドの掛け穴に掛けられていたもの、そして6はカマドの天井部に置かれていたものとみられる。



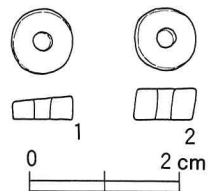
第18图 30号住居跡出土土器

番号	器種 (残存量)	口径 器高 底径	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調その他
				内面	外面	
1	土師器 坏 (完形)	14.5 5.0 ・	体部外面に稜を有す。 口縁部中程がやや肉 厚となる。	全面へら磨き。	口縁部はへら磨 き。底部はへら 削り。	胎土緻密。焼成良好。 暗褐色。
2	土師器 坏 (完形)	14.5 5.3 ・	体部外面に稜を有す。 口縁部は外反。	全面へら磨き。	口縁部は横ナデ。 底部はへら削り。	胎土緻密。焼成良好。 暗赤褐色。
3	土師器 甕 (完形)	12.6 14.5 6.9	胴部は球形。底部は 焼成後に穿孔。	口縁部は横ナデ。 胴部はへらナデ。	口縁部は横ナデ。 胴部はへら削り。	胎土は砂粒多し。焼成良 好。赤褐色。小型甕の転 用甕。
4	土師器 甕 (完形)	24.6 21.1 9.7	胴部は砲弾形。大形 単孔。口縁部は外反。	口縁部横ナデ。 胴部へらナデ。 端部へら削り。	口縁部横ナデ。 胴部はナデとへ ら削り。	胎土は砂粒多し。 褐色。
5	土師器 甕 (完形)	17.0 31.4 6.6	胴部最大径は中位で 24.3。口縁部は外反。	口縁部横ナデ。 胴部は指とへら のナデ	口縁部横ナデ。 胴部は指ナデと へら削り。	胎土は粗い砂粒多し。 暗赤褐色。胴下半部にス ス附着。
6	土師器 甕 (完形)	14.4 19.8 6.6	胴部は球形で最大径 はやや上位の18.5。 口頸部は直立。	口縁部横ナデ。 胴部へらナデ。	口縁部横ナデ。 胴部は指ナデと へら削り。	胎土は砂粒多し。焼成良 好。暗褐色。

第2表 30号住居跡出土土器一覧表

3と2は床面からの出土で、3はカマドのすぐ左脇に、2はカマド近くの柱(P₁)もとに、それぞれ置かれていたものとみられる。また、4は貯蔵穴の覆土中から出土したものであるが、恐らく貯蔵穴のすぐそばに置かれていたものが、住居の埋没に伴って横転したものと考えられる。このように、土器は総てカマド及び貯蔵穴の周辺に集中しており、しかも、当時の使用状態を比較的良く残した状態で検出されたものである。なお、各土器の特徴は、第2表のとおりである。

滑石製模造品(第19図) 2点とも白玉である。住居跡のほぼ中央部から2点近くに出土したものであり、いずれも床面から約5cm浮いた褐色土層中からの出土である(第16図A-A参照)。1は径8mm、孔径2.5mmで、厚さは一定でなく2mm~3mmである。2は径8mm、孔径2.5mm、厚さ4mmで、断面がやや平行四辺形気味となる。



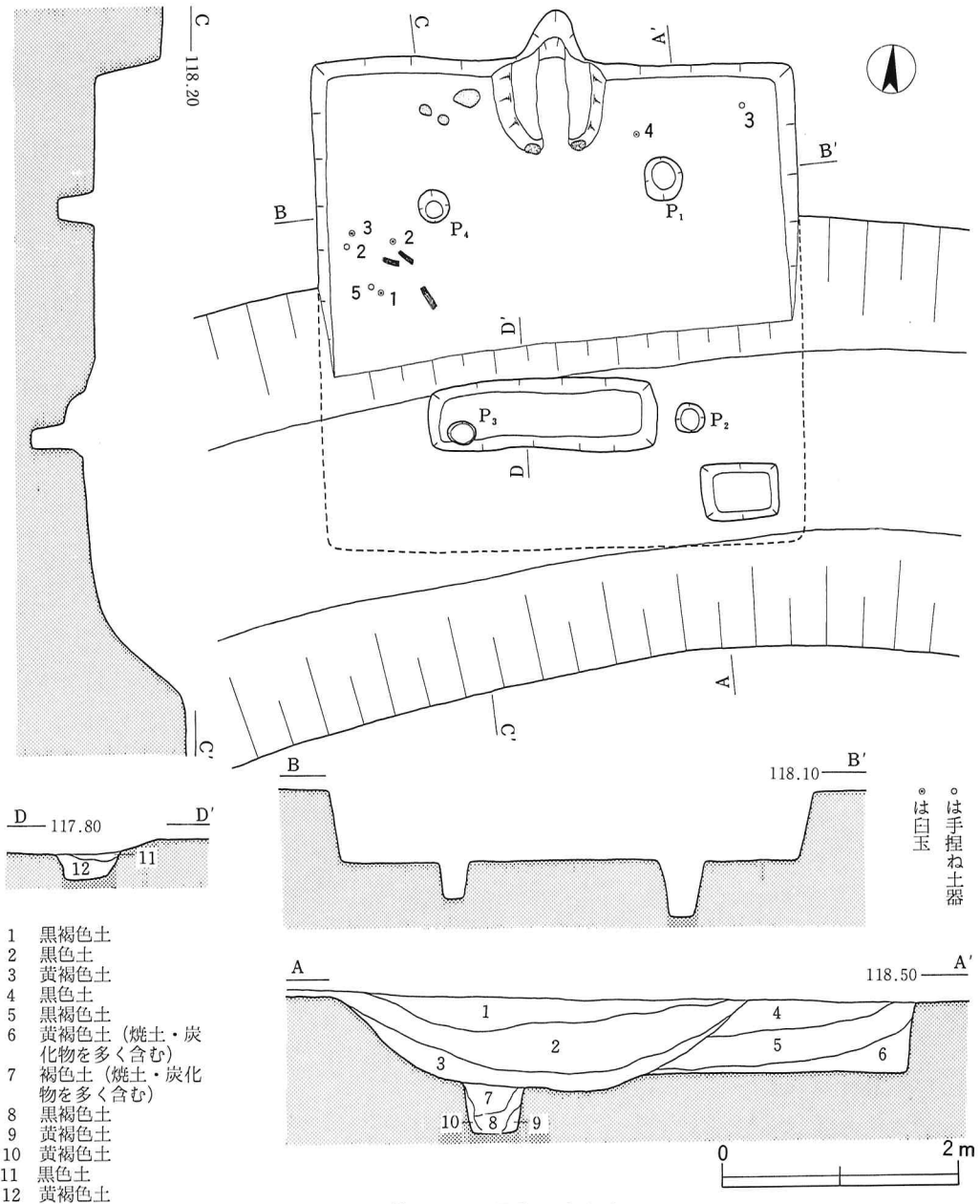
第19図 30号住居跡
出土白玉

3 36号住居跡

(1) 遺構について(第20・21図)

將軍塚古墳のほぼ真北に位置し、その南半分は將軍塚古墳北側の周溝に切られていたものである。幸い、將軍塚古墳の周溝中に2本の柱穴と貯蔵穴が検出されたため、本住居跡の形態・規模等は概ね復原することができる。平面形は方形で、その規模は、現存する東西長が4.08m、南北

長も東南コーナーに設けられたとみられる貯蔵穴の位置から推定して、ほぼ同じ長さと考えられる。壁は、検出面からの深さで55~60cmと深く、立ち上がり80度前後の急傾斜をもっている。床は、ほぼ平坦で、カマド前面から中央部にかけて固くなっている。支柱穴は、ほぼ対角線上に配された4本であり、それぞれの深さは、P₁が床面から48cm、P₂が周溝底面から35cm、P₃が同じく46cm、P₄が床面から32cmである。また、各柱穴の中心間の長さは、P₁-P₂が2.05m、P₂



—P₃が1.93m, P₃—P₄が1.88m, P₄—P₁が1.96mであり, P₁がやや外にはずれて位置している。貯蔵穴は, 南北コーナーに位置し, 平面形は65×49cmの東西に長い長方形である。深さは, 周溝底面から40cmであるから, 床面からでは約50cmあったものとみられる。なお, 壁下にまわる周溝の存在は確認されていない。

カマドは, 北壁のほぼ中央に設けられたものであり, その大きさは, 奥行が80cm, 幅が壁際で95cm 焚き口部で55cmである。煙道は, 壁の中程から約45度の傾斜をもつてのぼっており, 検出面では壁を約40cm切り込む形になっている。袖及び天井部には, 褐色粘土が使

用されており, 焚き口部は川原石によって補強されている。川原石は, 両袖部の先端にたてた2個が検出されており, 長さは, 25cmと20cmである。恐らく, この両川原石の上にさらに大きな川原石(検出された2個の川原石の間隔から推定して, 長さ40cm強のもの)が渡されていたものと考えられるが, 住居内からもそのような石は検出されていない。なお, 本カマドに関しては, 燃焼部の掘り込みが, ほとんど認められない。

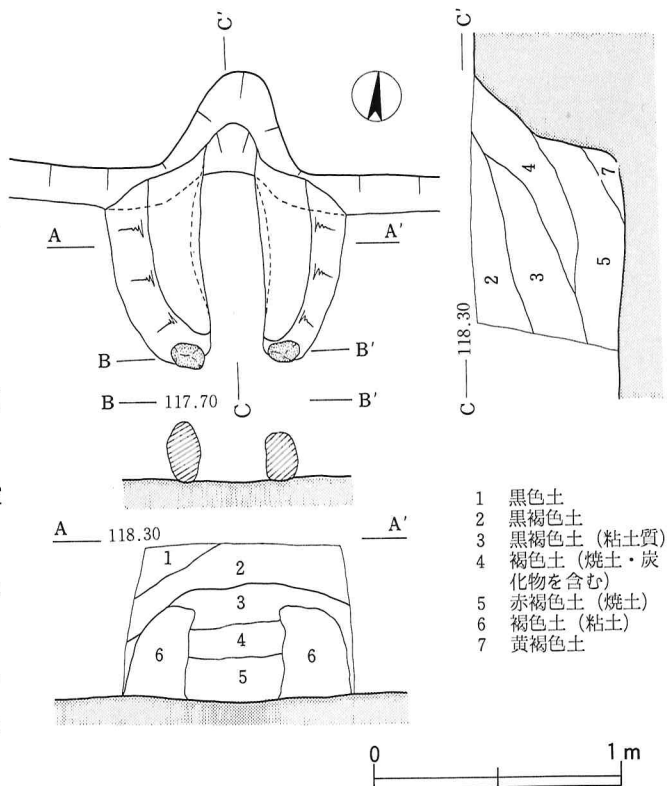
覆土の堆積状況は, 少なくとも北半部はレンズ状の自然埋没を示している(第20図A—A'参照)。なお, 西壁寄りの床面に炭化材が少量出土していることや, 住居覆土の最下層や貯蔵穴の埋土に焼土・炭化物等が多量に含まれていることなどから, 火災を受けた可能性が考えられる。

(2) 遺物について

本住居跡から検出されたものは, 土器と滑石製模造品である。

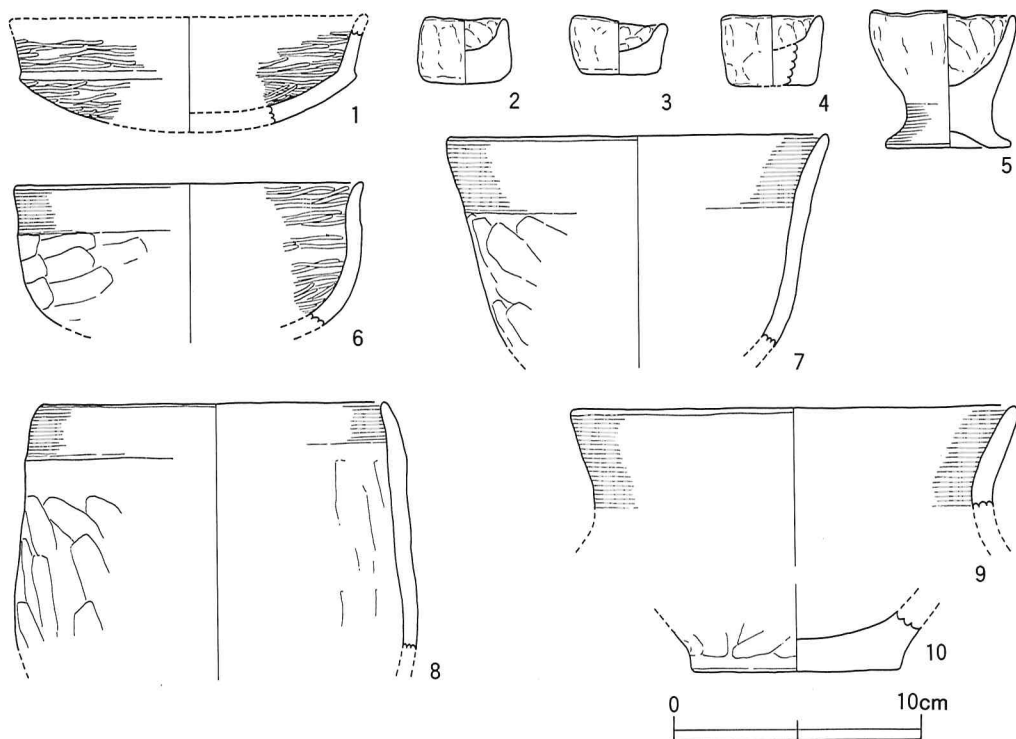
土器(第22図) 検出されたものは土師器と手捏ね土器であり, そのうち図示し得たものは坏1点(1), 埴1点(6), 鉢2点(7・8), 甕1点(9・10), 手捏ね土器4点(2—5)の計9点である。

2は, 西壁寄りで床面から約30cm上の覆土中から, また, 5もこの少し南で床面から約20cm上の覆土中から, それぞれ出土したものである。ただし, 出土層位は, 住居覆土の最下層である焼土・炭化物を含む黄褐色土層(第20図A—A'6層)中であるから, 床面から浮いてはいても, 住居廃絶後間もなく入り込んだものである。3は, 北東コーナーの床面直上から出土したものである。



第21図 36号住居跡カマド実測図

- 1 黒色土
- 2 黒褐色土
- 3 黒褐色土(粘土質)
- 4 褐色土(焼土・炭化物を含む)
- 5 赤褐色土(焼土)
- 6 褐色土(粘土)
- 7 黄褐色土

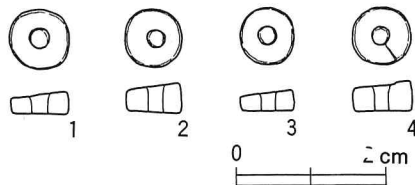


第22図 36号住居跡出土土器

7は、貯蔵穴の埋土中に混入していたものである。その他は、いずれもカマド周辺の覆土中からの出土である。それぞれの土器の特徴については、第3表に示すとおりである。

以上のように、本住居跡の出土土器は、手捏ね土器を除けば非常に貧弱なものである。南半分が將軍塚の周溝で破壊されていることもあろうが、他の住居跡の出土状況から一般にカマド周辺に土器が集中することを考えれば、やはりこの貧弱さは、本住居跡の特徴とみられる。なお、後述する滑石製模造品と手捏ね土器の組合せは、聖山遺跡集落内における本住居跡の性格を考える上で重要なものと言える。

滑石製模造品（第23図） 白玉4個が検出されている。1～3は、西壁寄りの手捏ね土器2，5が出土した近くであり、いずれも床面上数cmの黄褐色土層中からの出土である。また、4はやや離れ、カマドの右袖と柱穴P₁の中程の位置で、ほぼ床面直上からの出土である。各白玉の大きさは次のとおりである。1は、径8mm，孔径2.5mm，厚さ2～3mm。2は、径7.5mm，孔径2mm，厚さ3～4mm。3は、径7.5mm，孔径2.5mm，厚さ2～2.5mm。4は、径8mm，孔径2.5mm，厚さ3～4mm。いずれも、やや緑味をおびた淡い灰色を呈している。



第23図 36号住居跡出土白玉

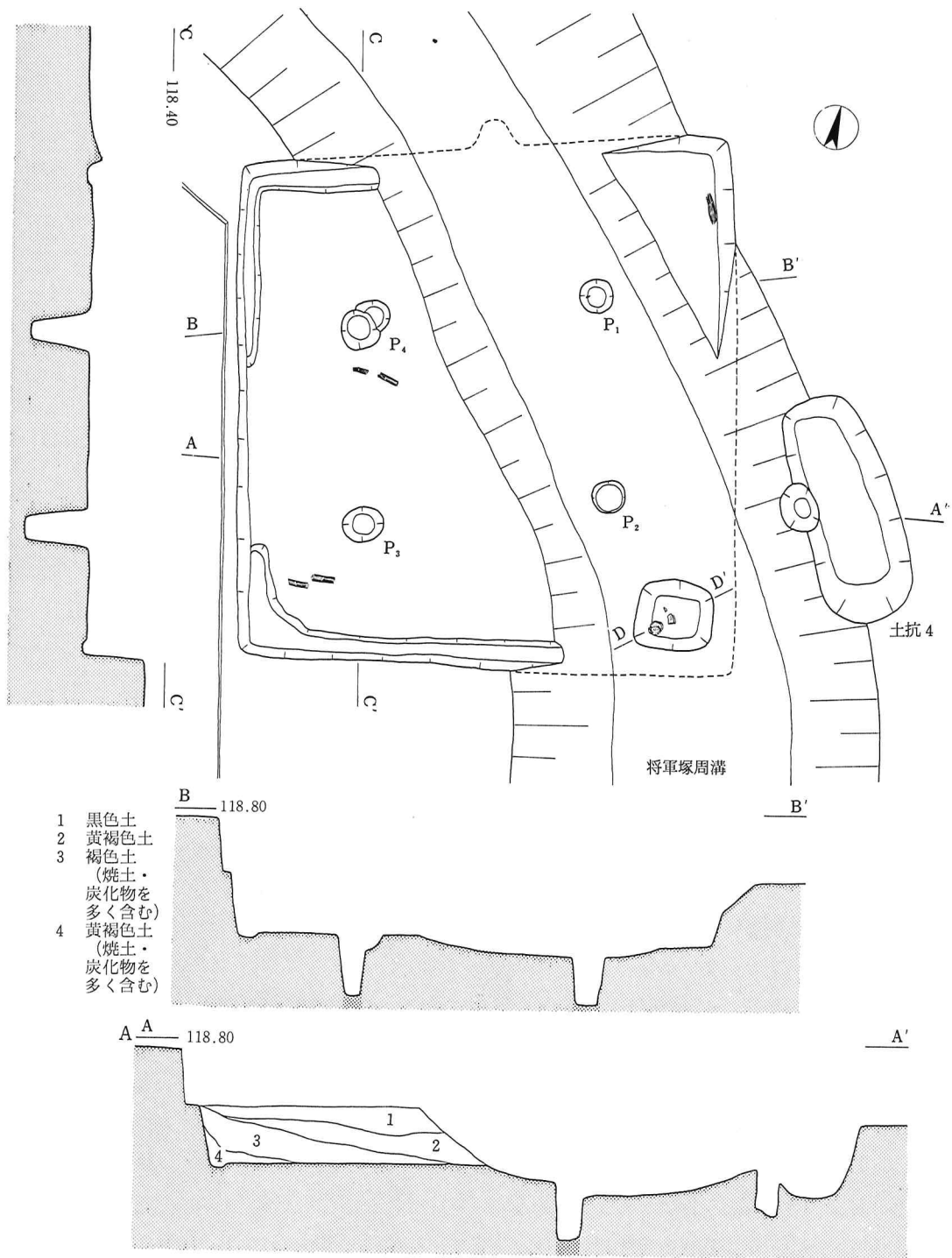
番号	器種 (残存量)	口径 器高 底径	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	土師器 坏 ($\frac{1}{2}$)	(14.3) (4.6) (・)	体部外面に稜を有す。	全面へう磨き。	全面へう磨き。	胎土緻密。焼成良好。暗赤褐色。
2	手捏ね 坏形 (完形)	3.3 2.6 3.5	平底で、口縁部はやや内傾。	手捏ねとナデ。	手捏ねとナデ。	胎土は砂質。淡赤褐色。
3	手捏ね 坏形 (完形)	3.7 2.2 3.0	平底で、口縁部は外傾。	手捏ねとナデ。	手捏ねとナデ。	胎土は砂質。淡褐色。
4	手捏ね 坏形 ($\frac{1}{2}$)	(3.8) 2.9 (3.3)	平底で、口縁部はやや外傾。	手捏ねとナデ。	手捏ねとナデ。	胎土は砂質。褐色。
5	手捏ね 高坏形 (完形)	5.7 5.5 4.9	脚部は短かく、坏部はやや深め。	坏部は手捏ねとナデ。脚部は横ナデ。	坏部は手捏ねとナデ。脚部は横ナデ。	胎土は砂質。淡褐色。
6	土師器 碗 ($\frac{1}{4}$)	(13.7) — —	体部は深く、口縁部が短く外反する。	全面へう磨き。	口縁部横ナデ。体部へう削り。	胎土は緻密。暗赤褐色。
7	土師器 鉢 ($\frac{1}{2}$)	15.0 — —	口縁部は、ゆるく外反する。	口縁部横ナデ。他は不明	口縁部横ナデ。体部へう削り。	胎土は砂粒混入。暗褐色。
8	土師器 鉢 ($\frac{1}{2}$)	13.7 — —	口縁部は、やや内湾。胴部は直線的。	口縁部横ナデ。胴部へうナデ。	口縁部横ナデ。胴部へう削り。	胎土は砂粒混入。淡褐色。
9 ・ 10	土師器 (口縁 $\frac{1}{2}$)	(17.7) — (8.3)	口縁部はやや外反。	口縁部横ナデ。	口縁部横ナデ。底部へう削り。	胎土は粗い砂粒混入。暗褐色。

第3表 36号住居跡出土土器一覧表

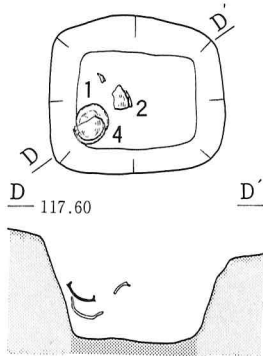
4 37号住居跡

(1) 遺構について (第24・25図)

36号住居跡の南東約10m, 将軍塚古墳の北東裾部に位置し, その北東部を将軍塚古墳の周溝によって切られているものである。北壁の中央部と南東コーナーが破壊されているが, 残存する3つのコーナーと貯蔵穴により, その平面形と規模を押えることができる。平面形は, ほぼ南北に軸をとる方形である。規模は東西長が4.6m, 南北長が西半部と東半部でやや異なり, 西半部で4.55m, 東半部で推定約4.9mである。壁は, 検出面からの深さが50~55cmと深く, 立ち上がり角度も北東コーナー付近を除けば85度前後の垂直に近いものである。床は, 東半部が将軍塚の周溝で破壊されているが, 残存部の状況からほぼ平坦で比較的踏み固められたものであったことが窺える。また, 北東コーナー付近と西壁中央部以外には, 幅15~20cm, 深さ7~8cmの周溝がめ



第24图 37号住居跡平面图



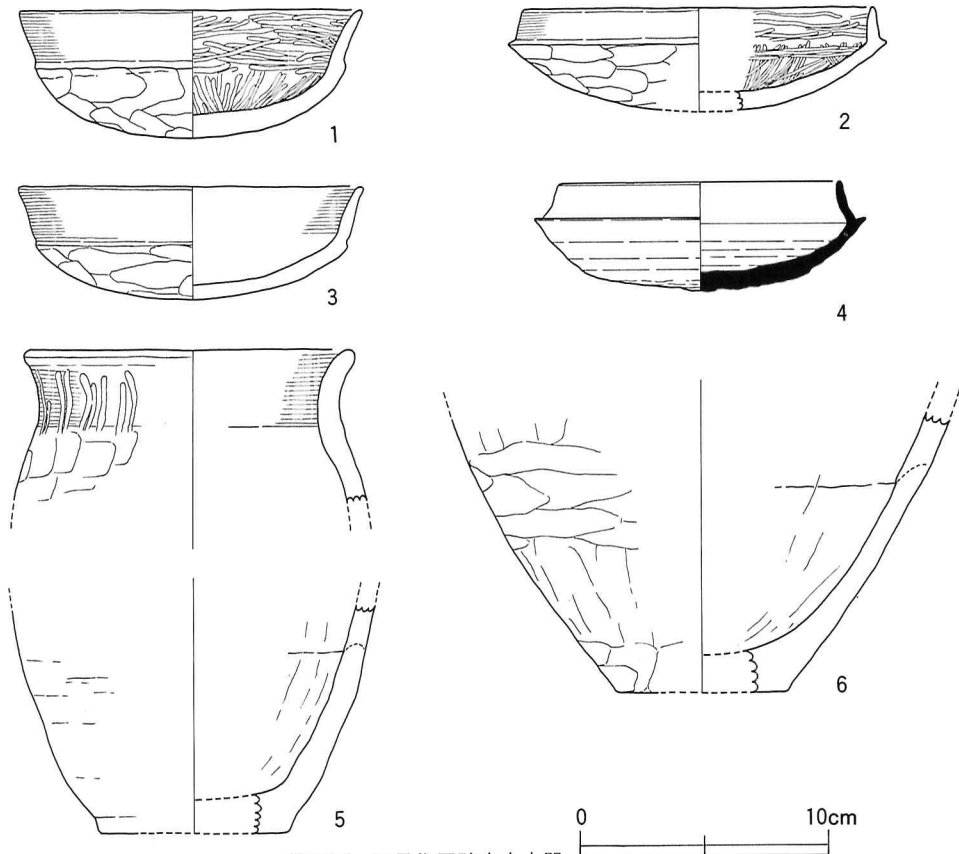
第25図 37号住居跡
貯蔵穴土器出土状態

ぐらされている。主柱穴は、ほぼ対角線上に配された4本であり、それぞれの深さは、 P_1 が周溝床面から45cm、 P_2 も同じく55cm、 P_3 が床面から60cm、 P_4 も同じく55cmである。また、各柱穴の中心間の長さは、 P_1-P_2 が1.83m、 P_2-P_3 が2.25m、 P_3-P_4 が1.80m、 P_4-P_1 が2.21mであり、やや東西に長い方形の配置となっている。貯蔵穴は、南東コーナーに位置し、平面形は71×64cmのやや東西に長い方形である。なお、周溝底面からの深さは37cmであり、床面からは55cmの深さをもっていたものとみられる。

覆土は、レンズ状の堆積を示しており、自然埋設と考えられるが、床面付近には焼土や炭化物・炭化材が多くみられ、火災を受けた可能性も考えられる。なお、カマドは北壁中央部にあったと考えられる。

(2) 遺物について (第26図)

検出された遺物は、総て土器である。1・2・4は貯蔵穴の覆土中層から出土したものであり、1と4は重なり合っていたものである。出土状態(第25図)からみて、貯蔵穴の縁にあったものが、住居埋没とともに流れ込んだものと思われる。3は北壁寄りの床面上から、また、5・6は南西コー



第26図 37号住居跡出土土器

ナー近くの床面上から、それぞれ破片で出土したものである。そのように、貯蔵穴内を除けば遺物の出土は非常に少ないわけであるが、やはり、カマド(恐らく北壁中央部にあったとみられる)付近が周溝で破壊されていることが大きく影響していると思われる。

番号	器種 (残存量)	口径 器高 底径	器形の特徴	調整の特徴		胎土・焼成・色調・その他
				内面	外面	
1	土師器 坏 (完形)	13.6 5.1 ・	体部外面に稜をもって口縁部は外反。	全面へら磨き。	口縁部は横ナデ 体部へら削り。	胎土は緻密。焼成良好。 褐色。
2	土師器 坏 ($\frac{1}{2}$)	(14.0) (4.1) ・	体部外面に稜をもって口縁部はやや内傾。	全面へら磨き。	口縁部は横ナデ へら削り。	胎土は緻密。焼成良好。 内外とも黒色。
3	土師器 坏 ($\frac{1}{2}$)	13.8 4.5 ・	体部外面に稜をもって口縁部は外反。	口縁部横ナデ 底面不明	口縁部横ナデ 底部はへら削り。	胎土は緻密。焼成不良。 淡赤褐色。
4	須恵器 坏 ($\frac{2}{3}$)	11.2 4.3 ・	受部は外上方へ張り出し、断面は三角。口縁は内傾し、端部は丸い	ロクロナデ。	ロクロナデ。 へら切り痕を残す。	胎土は白色砂粒を含む。 焼成良好。青灰色。
5	土師器 甕 ($\frac{1}{3}$)	(12.7) — (7.5)	口縁部は、ゆるく外反。	口縁部横ナデ。 胴部へらナデ。	口縁部横ナデ後 へら磨き。 胴部へら削り。	胎土はやや粗い砂粒を含む。 暗褐色。
6	土師器 甕 ($\frac{1}{3}$)	— — (7.0)	胴部はややふくらむ。	へらナデ。	へら削り。	胎土はやや粗い砂粒を含む。 淡褐色。

第4表 37号住居跡出土土器一覧表

V ま と め

以上が、今年度の主な成果である。将軍塚古墳については、周溝部分だけの調査ということから、墳形と墳丘規模を確認することが、当初の目的であった。しかし、前庭部の一部が検出されたことや整地層部分に凝灰岩の削り屑が確認されたことなどから、内部主体は凝灰岩(恐らくは切岩)を使用した横穴式石室であることが推測され、さらに、周溝内からの土器類の検出および竪穴住居跡との切り合いの確認などから、築造時期についてもある程度の判断を下せる資料を得ることができた。また、周溝に伴う長方形土坑のあり方は、本遺跡内2号墳、6号墳で検出されたものと共通するものであり、本遺跡内において一般的な形態として存在したことが明らかになった。一方、竪穴住居跡では、30・36号住居跡における石製模造品の出土が目玉である。いずれも白玉だけの出土であったが、前年度出土した子持勾玉同様、集落内祭祀のあり方を考える上で重要な資料と思われる。

図 版



(1) 発掘前の將軍塚古墳（西から）



(2) 將軍塚古墳周溝確認状況（北西から）

PL2



(1) 將軍塚古墳周溝完掘状況1 (南東から)



(2) 將軍塚古墳周溝完掘状況2 (北西から)



(1) 將軍塚古墳南東部周溝（南東から）



(2) 將軍塚古墳北東部周溝（北から）

PL 4



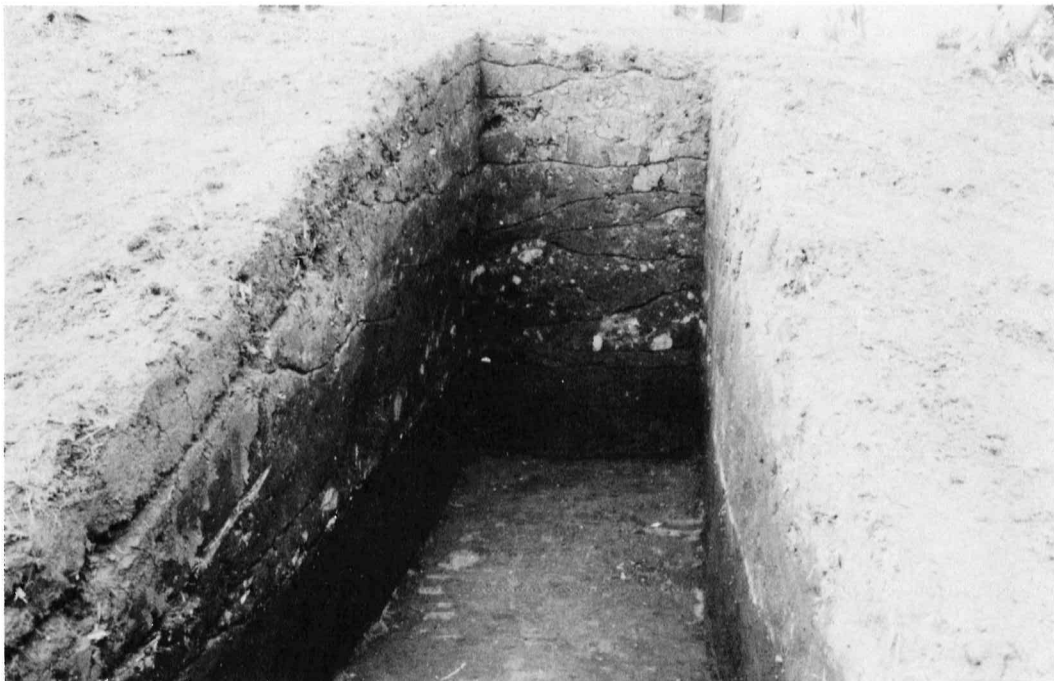
(1) 將軍塚古墳西部周溝（西から）



(2) 將軍塚古墳北東部周溝（東から）

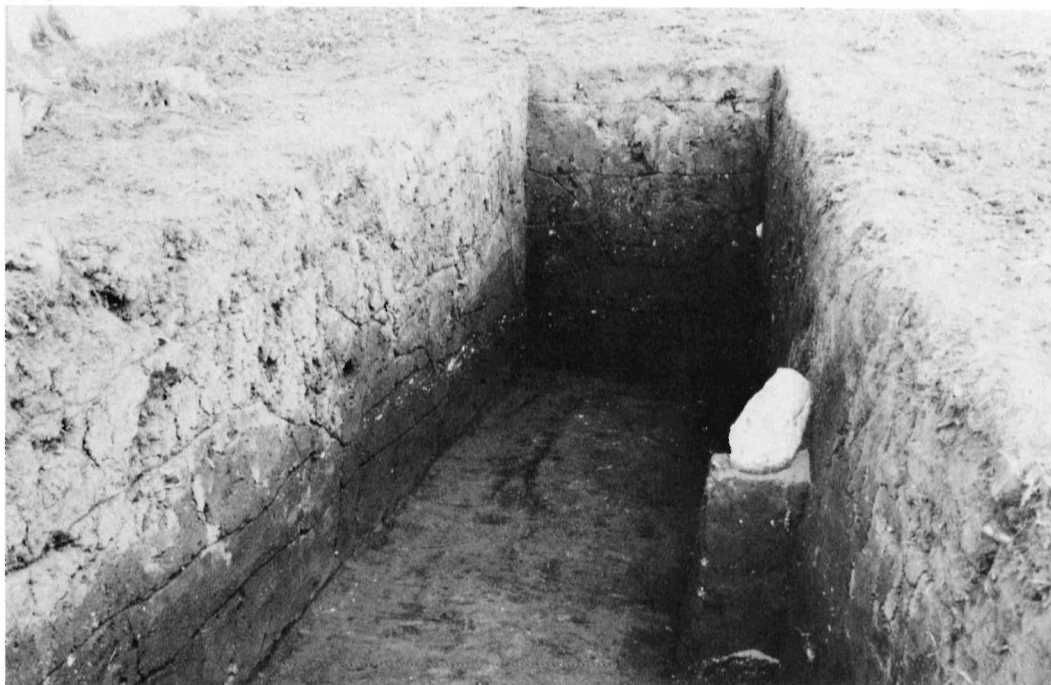


(1) 將軍塚古墳前庭部前面周溝断面（東から）



(2) 將軍塚古墳第3トレンチ断面（西から）

PL6



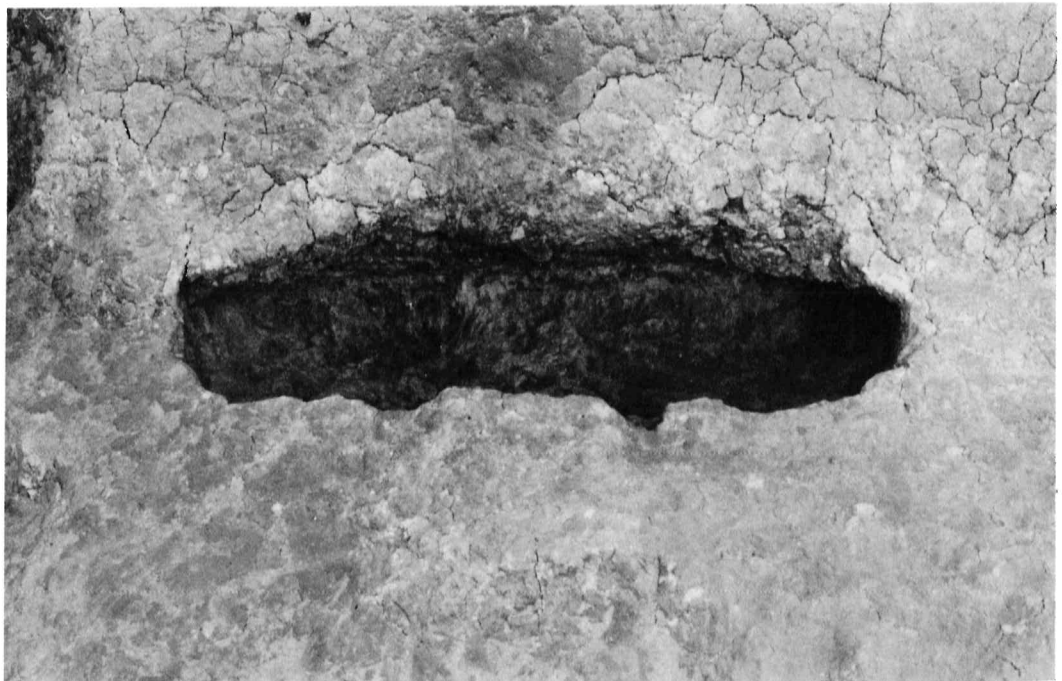
(1) 將軍塚古墳第1トレンチ断面（北から）



(2) 將軍塚古墳第1トレンチ東壁断面（西から）

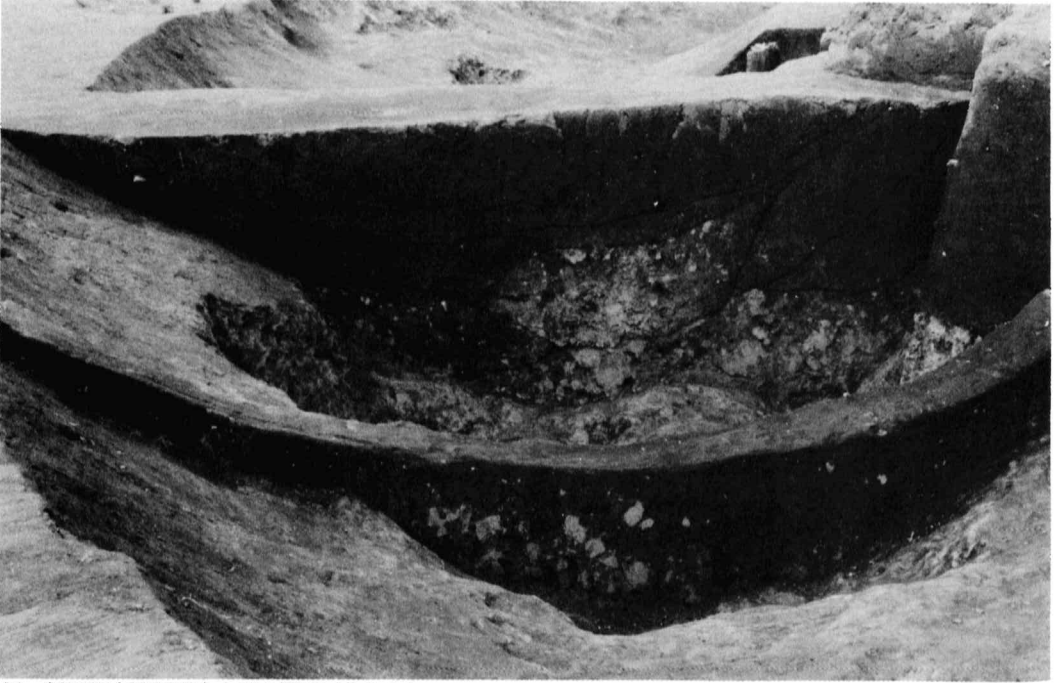


(1) 將軍塚古墳周溝内土坑5断面（南東から）



(2) 將軍塚古墳周溝内土坑5（東から）

PL 8



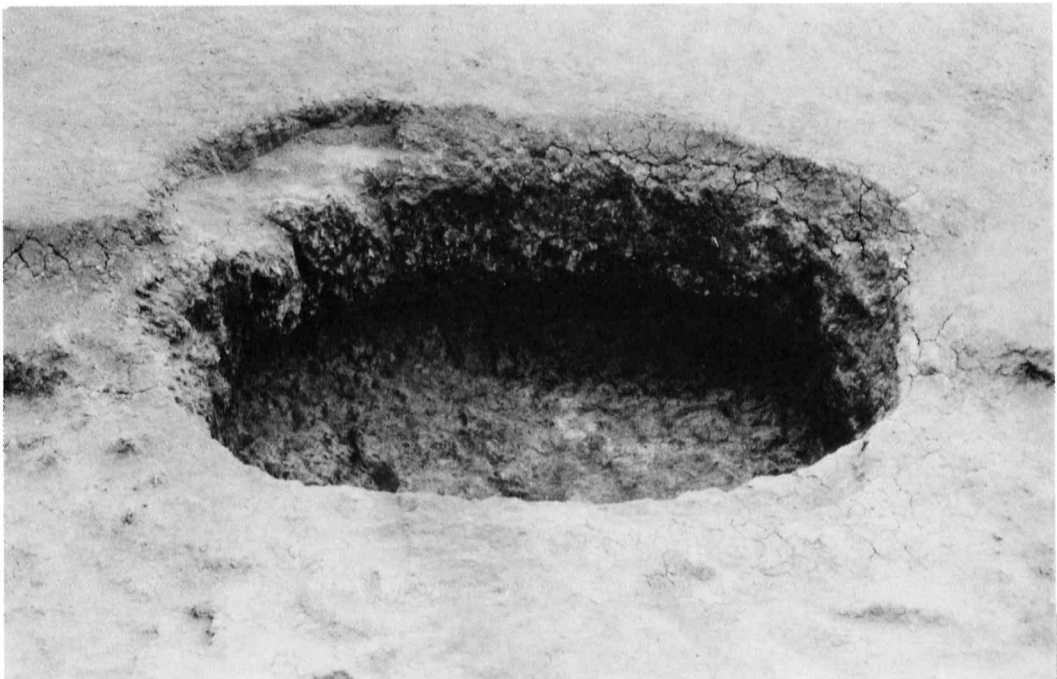
(1) 將軍塚古墳周溝内土坑 6 断面 (北から)



(2) 將軍塚古墳周溝内土坑 6 (南東から)

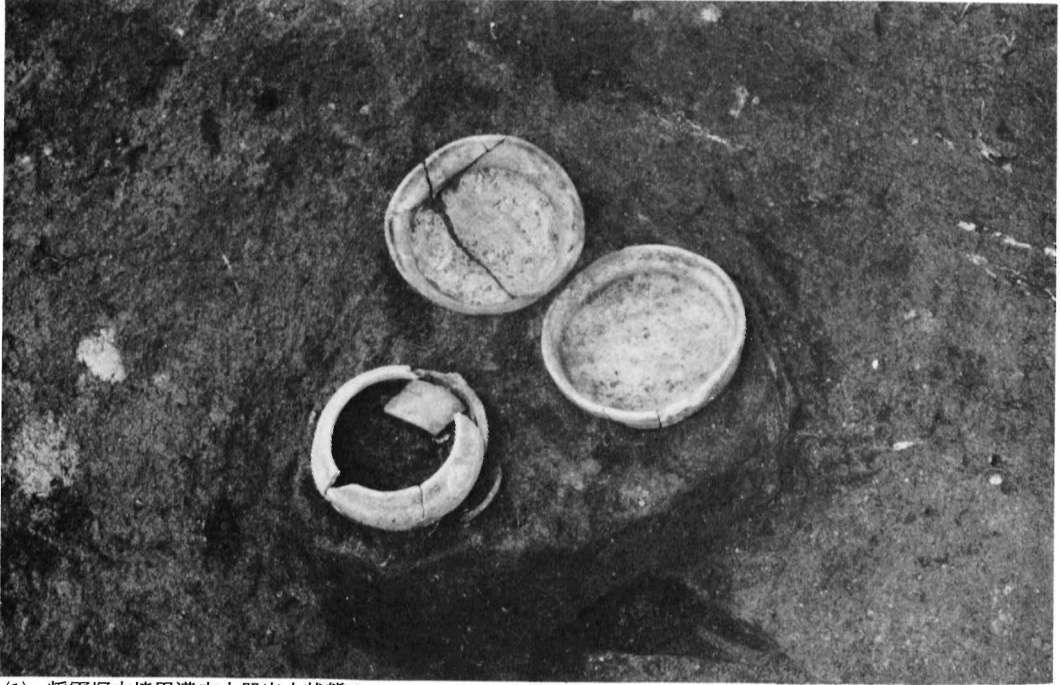


(1) 將軍塚古墳周溝内土坑 8 断面 (北東から)



(2) 將軍塚古墳周溝内土坑 8 (北西から)

PL10



(1) 將軍塚古墳周溝内土器出土状態 1



(2) 將軍塚古墳周溝内土器出土状態 2 (南東から)



(1) 30号住居跡（西から）

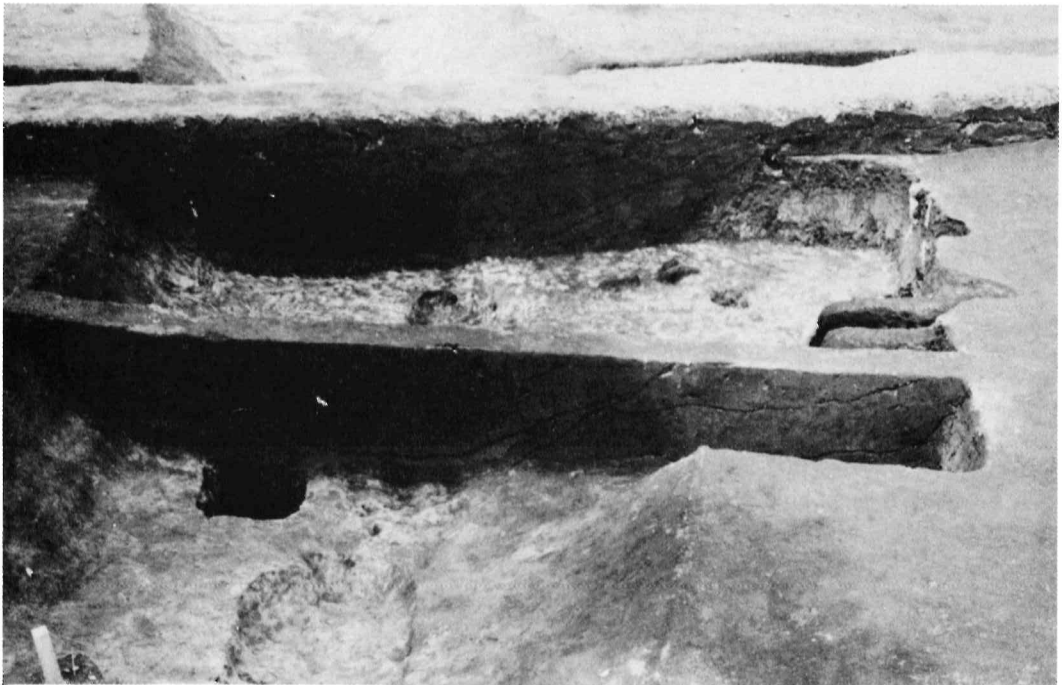


(2) 30号住居跡カマド周辺土器出土状態（西から）

PL12



(1) 36号住居跡（南から）



(2) 36号住居跡と將軍塚古墳周溝の切り合い関係断面（東から）



(1) 37号住居跡（南から）

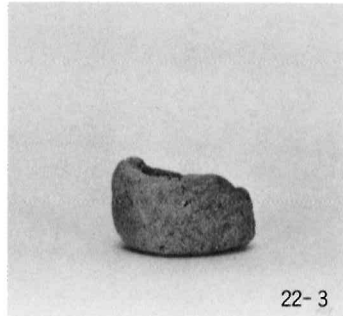
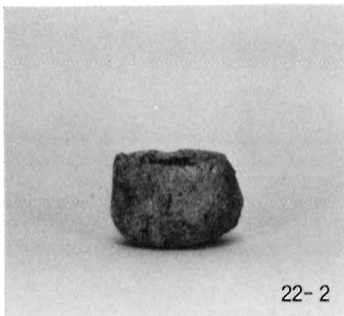


(2) 37号住居跡貯蔵穴土器出土状態（西上方から）

PL14



(1) 将軍塚古墳出土土器



(2) 36号住居跡出土土器

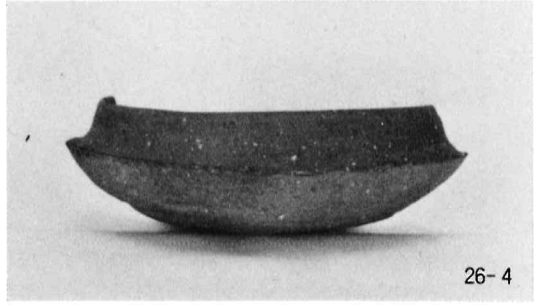


30号住居跡出土土器

PL16

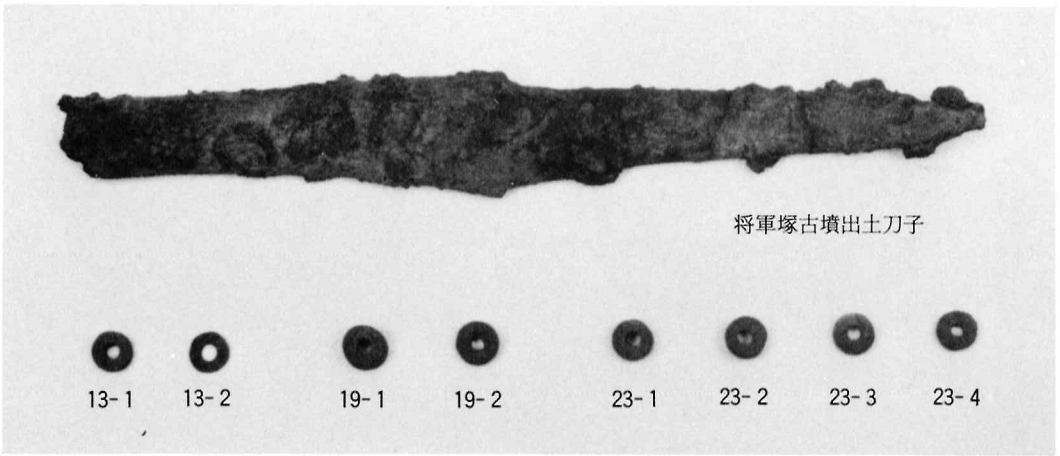


26- 1



26- 4

(1) 37号住居跡出土土器



(2) 出土鉄器及び石製模造品・白玉

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第21集

聖山公園遺跡Ⅳ

昭和61年3月発行

発行 宇都宮市教育委員会社会教育課

(宇都宮市中央1-1-13)

TEL (0286)37-2111

印刷 (株)松井ピ・テ・オ印刷

(宇都宮市平出町4287-7)

TEL (0286)62-2511
